

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA

でぽら

19

2000年
秋冬号

▲ 田舎こそNEWビジネスの舞台!
特集 活力ある地域産業の創造をめざして



田舎こそNEWビジネスの舞台

活力ある地域産業の創造をめざして

特集企画に寄せて

過

疎地域においては、過去30年間にわたって過疎対策事業が懸命に推進されたことにより、交通通信体系の整備も著しく進み、また上下水道・医療・福祉など、住民生活一般にかかるナショナルミニマムの確保が強力に進められてきた。

21世紀を目前に控えた今日、国民意識や時代の潮流は大きく転換しつつある。人々の価値観や生活観の多様化が進むにつれ、心の豊かさが重視されるようになり、自然志向が高まってきている。多くの人が、豊かな自然や多様な文化に恵まれた過疎地域に熱い眼差しを向けるようになってきている。

過疎地域はこの期待にこたえていかなければならない。

時

あたかも本年4月に全過疎団体の期待が施行された。同法は、過疎地域が21世紀に向かつて果たす役割として、「住民福祉の向上」「雇用の増大」「地域格差の是正」「美と風格ある国土の形成」の4つをあげているが、それを的確に遂行するためには、同法の趣旨からも明らかのように、地域が責任をもって自主的に多くの困難な課題を克服し、真の「地域の自立」に向かつて積極果敢に挑戦していくことが何よりも肝要である。地域経済の自立なくして、地域の将来展望は開かれまいだろう。

今日、地域の特性や資源を生かした多様なビジネスの創出、ゆとりある生活空間・自然空間に自己のライフスタイルを実現しようとして、Uターンをした人たちが個性的な仕事場を持つなど、こうした先進事例も過疎地域に多数見られるようになった。

—

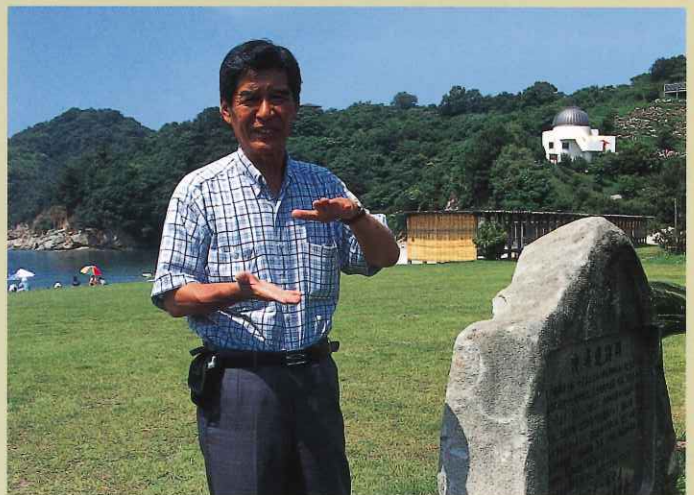
この例を情報通信ビジネスの分野からみた場合、過疎地域は、21世紀にふさわしいNEWビジネスの舞台に十分なり得ると思う。IT革命の時代を迎え、地域内外との情報交流を可能にする情報通信体系の整備は、地域にとって今後の最重要課題である。都市部との情報格差はまだ極めて大きいとはいえ、情報化の進展は、時間と距離からくる制約を解消し、過疎地域の地理的条件を克服していく強力な手段ともなる。情報インフラの整備に伴って、過疎地域においてもソフトウェアなど情報関連産業の立地が期待されるであろうし、熟練のOA技術者が緑豊かな田舎での新たなライフスタイルを求めてUターンすることも多くなるだろう。田舎で定職、子育てをしたいという若者も増えてきて、最近のUターンフェアはかつてないほどの盛況である。

で

「ぼら」19号では、環境保全、IT革命の進展にそって、地域固有のポテンシャルを生かした小規模であっても多種多様な産業の創設と活性化の促進をめざして、企画編集を進めた。

経済や地域問題の専門家の先見的指摘にもよるよう、「ビジネス」の捉え方は、従来の企業の発想のビジネスだけではなく、「いつでも誰でもどこでも創設できる」「自らの手でビジネスという手段を用いる地域おこし」「地域の存在する資源を再生、新たな価値を与える」という意味を持つていると考えている。

NEWビジネスの対象として、高度情報化時代のビジネス、環境を生かしたエコロジービジネス、農林業のニュービジネス、介護保険制度に合わせた新地域おこしなど、4つの



製塩土器を発見、古代製塩法を甦らせた「藻塩の会」代表・松浦さん。

分野に視点を置いて企画したが、企業者と話を交わしながら、会社を起こして発展させていくことの厳しさを実感することも多かった。しかし同時に、地方や農山村には熱意をもって夢を育もうとする人々がいれば、限りなく夢が広がり、多様なビジネスチャンスがあることも確信した。そんな人達が地域の元気づくりや拠点づくりに大きな影響を与えていることはいままでもない。

地域に芽生えた小さなビジネスや「仕事」集団。派手派手しさはないが、確実に21世紀への胎動を感じさせてくれる。地域の新しい産業創造に若干でも寄与できれば幸いである。

全国過疎地域自立促進連盟

「てぼら」編集部

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村数は1231、全市町村の38%にも達しています。過疎地域は貴重な自然環境と農林水産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土が多数残っています。農山村の活性化と発展をめざすため、地方と都市を結ぶ交流誌として『でぼら』をお届けいたします。回覧し、多数の方に高覧いただければ幸いです。

●写真・表紙①

左上/パソコンを楽しむ子供たち
(山田村)

左下/天然塩「海人の藻塩」(蒲刈町)

右上/苫前グリーンヒルwindパークの風車

右下/南牧村森林組合「粉炭センター」のスタッフ

▼有珠山災害を乗り越えて
(壮瞥町・湖畔荘の一家)



「田舎こそNEWビジネスの舞台」—— 活力ある地域産業の創造をめざして/特集企画に寄せて——2

■エコロジー・ビジネス



苫前町グリーンヒルwindパーク

・北の海風が吹く丘は[未来エネルギー]の牧場

苫前グリーンヒルwindパーク/夕日ヶ丘windファーム(北海道苫前町)——4

・風力発電を環境・まちおこしのシンボルに——7

・環境調和型地域づくりをめざして
宮城県鶯沢町エコタウンプラン——33

■農林業NEWビジネス

・豊かな自然と島民の夢が古代塩に蘇る天然塩「海人の藻塩」(広島県蒲刈町)——8

・集落営農に新しい可能性を——12

農業生産法人(有)ファーム木精(島根県頓原町)

・間伐材の粉炭を土壌改良材、調湿材に

炭入り飴、うどん、コンニャク等の炭食品も——14

南牧村森林組合(群馬県南牧村)



古代塩「海人の藻塩」

■情報通信ビジネス

・まず触ってみる。村民に自信と安心を。——17

パソコン普及率90%の“電腦村”(富山県山田村)

・小さな町から情報発信/ ネットで「過疎」サーチ——20

(岐阜県七宗町/山形県平田町/北海道標茶町)



ヘルパー養成講座が人気(木次町)

■介護保険事業で地域に安心と活力を

・生きる喜びを分かち、支えあう

在宅ケアとライフヘルプサービスを担って

[藤沢町ボランティアピアセンター]——24

(岩手県藤沢町)

・山間10町村の24時間介護サービスをめざして——27

[JA雲南すずらん福祉センター]

(島根県木次町)

でぼら・エッセイ

中国と日本の「一村一品」運動/関 満博——22

【特別報告】有珠山噴火から4ヵ月、復興をめざして。

山と共生しながら観光、農業の町へ(北海道・虻田町、壮瞥町)——30

INFORMATION

各地のベンチャー企業育成事業——34

全国過疎問題シンポジウム 2000 in ぎふ



エコロジー ビジネス

北の海風が吹く丘は [未来エネルギー]の牧場

苫前グリーンヒルウインドパーク/夕日ヶ丘ウインドファーム(北海道とま まえ ちやう苫前町)

風車の下で牧草刈りをする農家の人達。



「苫前グリーンヒルウインドパーク」のある苫前町は、日本海に面した人口約5000人の町。天然の良港として古くからアイヌと和人との交易の場として栄えてきた。明治に入るとニシン漁で賑わい、海岸に集落が出来るとともに内陸部にも道内外から入植者がきて開拓がはじまった。

地吹雪を楽しみ暮らしの知恵

馬や牛たちがのんびり草を食む。その上空を海からの風が吹き抜ける。風は巨大な風車のプロペラを回転させ、クリーンな電気エネルギーを無尽蔵に生み出す。日本最大級の集合型風力発電所・苫前ウインドファーム。上平グリーンヒルには2社39基の風車が建設され、夕日ヶ丘には町営の風車3基が立つ。総出力は5万2200kWで、完成すれば5万人都市の住民の一年間使用する電力をまかなえることになる。

霧の中でじっと羽をやすめていた風車が静かに回転しはじめた。間もなく霧が晴れ、風車は風を受けて心地よさそうに羽ばたき続ける。(ライトアップした夕日ヶ丘ウィンドファーム)



▲海岸沿いに立つ(株)トーメンの風車20基
 ▲町営風車「夕日ヶ丘ウィンドファーム」の完成予想図。来年には残る1基も完成。
 ▼町内上平、天谷の沢地区からは風車が真近に見える。



日本最大級の風力発電所

なかでも「やん衆」として青森方面から出稼ぎにきて当地に定住した人々は、浜からの強い風を利用して津軽風を上げて、望郷の思いと冬の暮らしを楽しんだ。大空いっぱい乱舞する津軽風は冬の行事となり、本場風づくりの技もこの地で伝承されてきている。町では地吹雪になり、時として交通アクセスが寸断されることもある強風を、どの程度強いかを調査したいと考え、平成7年から通産省の地域新エネルギービジョン策定事業・NEDOの風力発電フィールドテスト事業、さらには清水三重大学教授らと一年間にわたって風況調査を行った。背景には町内外の市民グループからの「風を生かした町おこし」等の積極的な提案、調査協力があつた。

北海道西部、日本海に面した海岸線、日本海オロクラインを北上し、やがて苫前町にさしかかると、丘の上に巨大な風車が立ち並ぶ風景が見えてくる。これが日本初、最大級の集合型風力発電所・苫前グリーンヒルウィンドパーク。地域の活性化を願う苫前町と、この分野では世界トップクラスの実績を持つ(株)トーメンの先進技術が巡り合って誕生、デンマーク製の最新鋭風車20基が設置されている。総出力は2万kW、1万4600世帯が一年間に使う電力量に当たる。

さらに隣接する東北部・上平地区の丘に登場するのが(株)ドリムアップ苫前が建設する19基。同社は苫前町と電源開発、オリックス等が共同出資した新会社で、風車を大型化することで3万kWの発電が予定されている。現在工事中で、平成12年度内には電力供給事業がスタートする。

これら2社の風車が立つ地区は400haに



▲工事中のドリームアップ苫前現場。1基の出力は1500～1650kWという大型機で、羽根の長さは33m、これを地上60mのところへ設置するという大変な作業だ。



▲デンマークから指導に来日している技術者。間もなく帰国するので、日本の技術者を連れて今日も現場指導へ。

●文/館 英和 ●カメラ/小林 恵

および、合計5万kWの風力エネルギーが北海道電力を通じて家庭や企業へ届けられる。一方、町の施設は白い砂と夕陽の眺望で人気の海岸に立つ「夕日ヶ丘ウィンドファーム・風来望」。平成10年から毎年1基ずつ建設、3基で2200kWの電力を生み出すことになる。電力は風車のライトアップ、海水浴場の管理施設に使用するほか、余剰分は電力会社へ。将来的には風力公園等を建設して、風を目で見て体験する施設を計画している。

「風力発電事業での苫前町の大きなメリットは、用地の大半が町営牧場であるため、牛や馬の放牧場、牧草地としてそのまま活用できることです。風車は機器がすべてコンピュータ管理されていますので、町民の雇用の機会は期待できませんが、法人税等が入ってきますので、財政的に安定します。加えて、視察や観光客が多くなり、町に活気が出てきたことです」とプロジェクト推進室の渡辺正室長は語る。

これらの歳入を生かして、町は交流施設や観光地の整備等に力を入れている。

日本海オロロンライン（稚内から苫前、留

萌などを通り小樽へ至る日本海コース）の間拠点として新日本海地域交流センター」とままえ温泉・ふわっと」（風+Wを意味）が12年5月にオープン。周辺には新鮮魚介類の採れる漁港やオートキャンプ場、マリンスポーツ施設等があり、ウィンドパークがダイナミックな日本海の大パノラマに彩りを添えた。

風力発電機はハブの高さまで45m、羽根先端までは72m。地球温暖化の要因となるCO₂の排出量、酸性雨の原因となる窒素酸化物等はゼロのクリーンなエネルギー。そのため馬や牛たちには何の影響もない。

のんびりと草をはむ姿に、未来を感じた。



プロジェクト推進室の渡辺室長。連日のように見学者があり、それを案内するのの仕事。いきいきとてきばきた対応ぶりに感心した。

風力発電を環境・まちおこしのシンボルに 中山間市町村が続々参入



上/立川町ウィンドファーム
(600kW 4基、400kW 2基)
下/大分県前津江村榑ヶ鼻
ハイランドパーク(245kW 2基)

自然エネルギーのシンボルとして注目される風車。風をクリーンエネルギーに活用しようという動きは10年ほど前から始まったが、平成9年より国の事業助成制度がスタート、電力会社も風力発電の買い取りを長期的に行う方針を打ち出したことから、自治体が風力発電事業に参入する動きが多くなってきた。

風力発電では国内最大規模をもつ苫前町だが、すでにえりも町、稚内市、留萌町、松前町、瀬棚町等13市町村で稼働中。1基から2、3基へと増設計画をもつ町村、新規参入を予定している地域も多い。室蘭市には国内初の1000kW級の風車が昨年登場した。

自治体が主体になって風力発電事業に取り組んでいる地域を幾つか紹介しよう。

風、太陽、水——自然を活用する 岩手県葛巻町

岩手県の北上山地北部に位置する葛巻町にとつて冬場の強風は悩みの種で、牧場の有刺鉄線がひと冬でポロポロになるほど。この風を逆手に生かそうと99年6月に400kWの風車3基をもつ「エコ・ワールドくずまき発電」が誕生した。

総事業費は34億円。半分を補助金でまかない、残りは電力会社と設立した第三セクターが金融機関から借り入れたが、年間3500万円の電力収入になっている。これは町民の年間消費電力の3分の1にあたるという。

町では、風力だけでなく太陽熱を利用した農業、水力の有効活用、さらに畜産糞尿を新エネルギーに活用しようという研究に力を入れている。とくに牛は1万2000頭が飼育されており、一日4300トンの糞尿が出る。このメタンガスに間伐材を混ぜて商品化し、ボイラー等の燃料に生かそうというもの。自然を生かした環境対策の町として取り組みが期待される。

風力発電のさらなる増設

「風の町・立川」(山形県立川町)

風車の先進地立川町は、昭和55年から設置に向けて取り組み、これまでに1000kW型3基、400kW型2基、600kW型2基が稼働660万kWを発電している。町ではさらに2基を設置する工事が行われており、合計9基の風力発電体制になる。人口7500人の町

だが、2005年までに町民の電力はすべて風のエネルギーでまかなう計画。第三セクター「たちかわ風力発電研究所」が風力発電会社エコ・パワーとタイアップして東北電力に年間2000万円程の電力を売っている。将来は17基まで増設し、「風の町・立川」としてエコランド事業を町おこしの特色にしていこう計画だ。風のドームを生かした「ウィンドーム立川」は観光客も多く、風をメインにしたイベントやシンポジウムが開かれている。

ジャンボ風車でトマトの温室栽培

愛媛県瀬戸町

瀬戸町の瀬戸内海を見下ろす佐田岬の高台に高さ30mの風車がある。道の駅・瀬戸町農業公園の中にあることから、訪れる人々にも人気をよび、観光の名所になっている。

発電能力は100Wだが、電力はミニトマトのハウスに電力として供給され、収穫されたトマトは道の駅で1パック150円という安値で販売され、それがまた人気をよんでいるという。トマト以外にも町内の他の農業施設にも電力を供給することができ、町営発電所では2基目の建設を検討している。

風力発電推進市町村全国協議会

風力発電事業を行っている全国の37市町村(平成11年12月現在)が加盟しており、毎年一回、「全国風サミット」を開催している。平成6年立川町で第一回目を開催、以来、平良市、脇川町(愛媛県)、えりも町、室蘭市、前津江村(大分県)、葛巻町で開催してきた。

風力発電に関する研修、情報の提供を行っていくと共に、クリーンエネルギー風力発電の必要性を広くアピールし、関係団体との連携、政府や電力会社等への陳情・要望活動を行っている。事務局

山形県東田川郡立川町大字狩川 ウィンドーム立川内
☎02334(56)3360



豊かな自然と島民の夢が古代塩に蘇る 三セクの製塩工場も順調に稼働

天然塩「あまびと海人の藻塩もしお」
(広島県 かまがりちよう 蒲刈町)

一片の土器片が生んだ
古代ロマンへの夢

人口3000人、蒲刈町には「日本の渚百選」に選ばれている県民の浜がある。その建設に注目したのが考古学に詳しい郷土史家、松浦宣秀さん(63)。室町時代より続く古寺・来生寺の住職である。

浜のリゾート開発の話が出る2年前に、浜の畑で土器片を調査している時、一片の土器の底部をみて製塩土器ではないかとひらめいた。緊急発掘を行ったところ、古墳時代から中世の製塩遺構が出土した。

……松帆の浦に朝なぎに玉藻刈りつつ
夕なぎに藻塩焼きつつ 海人女あり……

万葉集より



瀬戸内に浮かぶ大小9つの島からなる広島県蒲刈郡。そのなかのひとつ美しい島・蒲刈町の浜で古代の製塩土器が発掘された。考古学、郷土史に関心をもつ住民が古代の製塩法に挑戦、10年の年月を経て「海人の藻塩」は誕生した。

この塩に注目したのが東京の食品会社社長。新たな特産品開発を模索していた町と意思が一致し、早速第三セクターで製塩会社を設立、工程の一部を機械化したものの古代の技法をそのまま生かした天然塩はグルメな人達にも好評だ。

土器製法に関する具体的な手法は解明されていない。大学で仏教考古学を学んで以来、帰島後も通水、名水、石仏等の調査をしてきた松浦さんは、万葉集の「朝なぎに……」の一節をヒントに文献や資料を当たって研究を続けた。玉藻とは、玉状の気泡をもつ浜に打ち上げられるホンダワラと推測できる。

2年後には賛同する教師、町職員、主婦ら十数人が加わり「藻塩の会」が結成された。メンバーが試行錯誤しながら意見を出し合い実践に明け暮れる日々が続いた。そしてある日ついに藻塩作りを成功させた。



「発掘した製塩用の土器の底はこんな感じだった」と語る松浦さん。

「はじめて口にした時、古代の人はこんなに美味しい塩を食材にしていたのかと驚きました」と松浦さん。

古代製塩法から誕生した藻塩とは――。

乾燥した藻を瓶のなかで海水に浸して塩分を洗い流す。これを繰り返して塩分を凝縮させ、土器で煮詰めていくと茶色で臭いのある塩が出来た。使用した藻は乾燥させて焼くと灰の中に結晶ができる。この結晶を濃縮液に入れると黒いどろどろした液となり、それを布こしして一昼夜置くと固形分が沈澱して茶色の液が出来る。この上澄み液を土器で煮詰めると、ついに古代人が食した藻塩が誕生した。藻の灰が活性炭の役割をするので臭いや苦みが吸収されて、藻の成分が旨味として生かされたコクのある塩となった。

「ここで製塩土器を発見した」と語る松浦宣秀さん。遺跡の発掘作業は後日改めて行うことにし、いまは砂で埋めて碑だけを立てている。



上／優美な弧を描いて広がる砂浜や岬の美しい海岸線が人気で、日本の渚百選に選ばれた「県民の浜」。

下／この一角に製塩工場・蒲刈物産が建設された。

藻塩をまちおこしの目玉に

町も松浦さんたち藻塩の会の研究を高く評価、町制施行40周年記念行事に「古代の塩作りシンポジウム」を開催した。古代製塩法を実証したところ考古学者も認め学会に大きなインパクトを与えた。今まで見過ごしてきた土器の破片の中に藻の焼けたものが各地で見られたのである。

町は藻塩の会に島を訪れる修学旅行の小学生の土器製塩体験学習を依頼し、関西方面の小学生約300名が体験した。これが評判を呼び今では8校約900人がやって来る。

ボランティアの住民があらかじめ土器の鉢を制作しておく。続いて、海水に藻を入れて作ったかん水（煮つめては2〜3日繰り返かえす）を用意しておく。かなりきつい作業だが、子供たちは自分で作った塩のに入った土器を大



小学生の土器製塩体験学習。浜辺に土器を並べてかん水を入れ、炭火で煮つめていく。

切に持って帰る。その姿を見ると苦勞も吹き飛ぶという。

マネージャー兼営業
担当の高畑秀誓さん。
海水取水口の前で。



97年5月にテレビで土器製塩体験の様子が放映されたところ、その日のうちに島へ飛んできた人がいた。東京で食品会社を営み美味しい塩に関心をもつ朋和産業㈱の社長表敏昭さんだった。

量ではなく品質や安全性にこだわってきた表さんは塩の研究もしていたが、藻塩を「口にふくんだ瞬間甘ささえ感じる。世界一美味しい塩だ」と賞賛し、生産したいという話になった。

町、会社、民間との第三セクター設立の話がまとまり、98年に蒲刈物産㈱が誕生。藻塩〔海人の藻塩〕の生産が始まった。社員を募集したところ予想を上回る反響があり、青年たちがI・Uターンしてきた。現在4人の若者が働いている。

日浦栄治さん(32)。島で小学校臨時教員を8年間勤めたあと転職して蒲刈物産設立から働く。塩は生き物と同じ。作業で難しいのは湿度」と言う。(藻を海水で煮つめていく作業)



日浦健作さん(24)。広島市で自動車部品製造の会社に勤めていたが、求人広告を見て応募した。父の出身地で、小さい頃遊びに来た思い出の島。(煮つめると茶色い塩の結晶ができる)



宮東順士さん(29)。昨年4月に広島市の自動車会社を辞めて来島。最後の塩を炒る作業を担当。熱気の中で大変だけれど、やりがいがあります。(最後に、ふるいにかけて整える)



「やりがいのある仕事です」 U・Iターンした若者の手で

97年5月にテレビで土器製塩体験の様子が放映されたところ、その日のうちに島へ飛んできた人がいた。東京で食品会社を営み美味しい塩に関心をもつ朋和産業㈱の社長表敏昭さんだった。

量ではなく品質や安全性にこだわってきた表さんは塩の研究もしていたが、藻塩を「口にふくんだ瞬間甘ささえ感じる。世界一美味しい塩だ」と賞賛し、生産したいという話になった。

町、会社、民間との第三セクター設立の話がまとまり、98年に蒲刈物産㈱が誕生。藻塩〔海人の藻塩〕の生産が始まった。社員を募集したところ予想を上回る反響があり、青年たちがI・Uターンしてきた。現在4人の若者が働いている。

県民の浜の一角に建設された製塩工場。古代の製法を忠実に再現しながら、機械化作業も取り入れて安定的に生産しようということも研究作業が始まったが、「なかなか松浦さんの良しとする味が出なかった」とマネージャーの高畑秀誓さん(43)はふりかえる。

高畑さんは98年に家の事情で広島での生活を切り上げて帰郷、6月、蒲刈物産㈱稼働と同時に入社した。

満点ではないが7月21日に商品が出来て出荷にこぎつけた。以来休日なしで社員一丸で取り組み、当初は日産80kgで採算ラインを下回っていたが、今は釜を4基から7基に増やし一日150kgを生産している。それでも注文に応じることがやっとか。

10%の海水でかん水を作りホンダワラを煮出したエキスを混ぜて釜で5、6時間煮詰め、ていくと7つの釜で150kgの塩ができる。

ホンダワラは中国大連の島で養殖したものを輸入している。

藻塩は、海藻を利用するということで他の天然塩とは大きな違いがある。海藻を焼いた灰やそのエキスにより、ヨードやミネラルを含み、深い味わいのある塩になっている。

「海人の藻塩」は99年11月全国村おこし物産展で通産大臣賞を受賞した。包装もよく、巻紙包み(500g 1800円)、布袋入り、土器入りがある。

朋和商事㈱という企業の参画も大きな成果を生んだ。著名な料理家やレストラン等のシェフが藻塩を使った料理を紹介しているお洒落なパンフレットなどを制作、都会的センスにあふれている。さらに、レストランで実際に使用する機会が増えて、古代塩の付加価値をより高めている。

一方町民の間では、藻塩を使った梅干し、味噌、醤油作りもはじまり、漁業組合でも藻塩を使用した小鯛干物の製造を計画している。

取材・写真/小林 恵

▲下蒲刈島から上蒲刈島を望む。



きれいな海がとても大切——子供たちの感想

蒲刈物産欄では「海人の藻塩」を消費者に直接送る際、子供たちの書いた作文などを入れている。子供たちは塩づくりを通じて、大昔の人はえらいなあと感じ、そして、この美味しい塩を作っていくためには美しい海が必要だ、と考える。多くの人を感動させている蒲刈小学校6年高畑マミさん（高畑秀馨さんの姪）の作文を紹介する。

も塩作りを体験して 蒲刈小学校60年 高畑マミ

「どうしようかなあ…。まあいいや、私ひとりくらゐですたつて…。」

私は、ときどきおかしなふるくろやポケットの中のゴミなど、ポーンと海にすてていました。

でも、今では「ああ、だめだ。海がきたなくなつたら、貝や魚が住めなくなる。もうせつたい海にこみをすてないぞ。」と思うようになってきました。

四年生のとき、近くの県民の浜で、も塩作りをしました。

土きに茶色の海水を入れて、そのまわりで火をたいてぶつとさせます。あふれ出しそうになつたら、少しずつ海水を注ぎます。これを何回も何回も、水がじょう発してしまつまでくり返しました。

わたしは、も塩のもとになる海水が茶色なので、びつくりしました。海草を海につけてはかわかしてつけるのをくり返したから、茶色のこい海水になつたとわかつて、安心しました。茶色は海草の

色だつたのです。

この塩は、海の水がきれいだからできるけど、きたなかつたら食べる気がしません。それに、海の水がきたなかつたら、も塩を作るのに必要なもが育ちません。

私たちの住んでいる蒲刈には、二万二千年くらい前から人が住んでいたそうです。そして、千五百年くらい前、も塩を作ることを考え出したそうです。私は大昔の人はえらいなあ、と、びつくりしました。

大昔の人と同じやり方で作ったも塩は少し茶色ほかつたです。

さつそく焼きたてのジャガイモに、バラバラとかけてバクツと食べました。塩なのに、あまく感じるのです。そうして、こんぶの味が口に広がりました。いつもの塩と感じがちがうのです。どうしてか、不思議でした。

大昔の人にとつて、とっても大切な塩だつたらうなと思ひました。

大昔の蒲刈は、ごみがなくて、水が海の底まですきとおつて、魚も海草もいっぱい住んでいるきれいな海だつたんだらうなあと思ひます。

私は考えました。千五百年前の蒲刈の人たちのも塩作りの伝とうをうけついでいくためにも、大昔と同じようなきれいな海にしたいかな、と。私は、茶わんあらいをするときなど、スポンジにせんさいをジャーとかけてあわをぶくぶくにしてあつていました。でも、今は、海をよごさないように、ちよつびりつけてあつています。

私は、も塩作りを体験して、蒲刈の海をもつと大切にしようと思ひました。

2〜3日間繰り返すと濃い海水（かん水）になる。



藻は乾燥、炭火焼きして粒状にし、かん水に入れる。



完成間近、最後に入念に混ぜて美しい顆粒塩に。



恵みの丘は 太陽光発電システムの研究機関



■太陽電池・モジュール/単結晶シリコン125mm角セル36枚 最大出力85.5W
アレイ/モジュール234枚・総最大出力20.007kW

県民の浜からほど近い丘陵地には、蒲刈町とNEDO（産業技術総合開発研究機構）が共同で研究設置している太陽光発電システムがある。

人と環境に優しい自然エネルギーとして注目されている太陽エネルギーだが、経済性や実際の使用条件下でのデータが充分でないことから、各種データを集めて今後の運用に役立てようというもので、見学者も多い。

太陽電池は半導体の一部で、太陽等の光を受けると光エネルギーを直接電気エネルギーに変える。恵みの丘のトマトや花き施設内での使用電力（照明、空調他）をまかなう他、電力会社と接続して送電（売電）したり、不足する際は買電するようになってる。

・問い合わせ／蒲刈町役場産業観光課

☎0823(66)1111

・藻塩については

☎0823(66)1173 県民の浜「輝きの館」へ

▶ほ場整備された水田地帯。
▼農機具の実習会に集う会員
たち。



集落営農に新しい可能性を 農業生産法人(有)ファーム木精^{こだま} (島根県頓原町)

●ブナ林等のある
豊かな自然郷

一人より二人、二人より三人。みんなの力を合わせれば新しい可能性が生まれてくる。集落全体を一つの耕作地(会社)として捉えて、地域の住民がさまざまな形(会社員、パートタイマー)として参加するという農業の会社が島根県頓原町に設立された。

頓原町は国立公園三瓶山やブナ林や貴重な動植物が生息する大万木山の麓にある豊かな自然郷。集落営農を始めた頓原上地区は、中心地・役場の北東2kmにあり、大万木山の麓にある。新会社は、木々に住む精霊をイメージして「ファーム木精(こだま)」と名付けられた。

呼びかけ人はこの地区でただ一人専業農業を営む加瀬部一倫さん(47歳)。北海道江別の酪農大学を出たあと、同地方に残って生産を基盤とした観光牧場を7年間手伝った。帰郷に当たっては、親は勤めに出ることを望んだが、それだったら帰らない、食べられなくても納得のいく農業をしたいと言って帰ってきたという。牛が13、14頭いて、あとは水田と自家用の野菜。北海道で楽しみながら農業をやることを体験してきた加瀬部さんだが、「このあたりの農業は、田んぼ1haあって所得は200万円。それを上げるのに800万円かかる。昔からの農地で機械をそれぞれが持つてやっても駄目だということを痛感しました」

頓原上地区の農家は54戸で、水田面積は47ha。他に大豆や飼料作物、施設園芸等の複業農業をしている。皆兼業農家だが、農業を辞めてよそへ移住したという家はなく、住民は森と川のある肥沃な大地と温暖な気候に愛着を持っているようだ。



最後のほ場整備工事が行われている。

●ほ場整備をきっかけに
営農体制の検討

5集落からなる上地区では平成4年からほ場整備の検討をはじめ、地区内のほぼ全戸が参加して担い手育成基盤整備事業を7年に導入した。若者グループ「あすなる会」が出来て営農体制づくりを検討、その第一歩として8年には機械の協同導入計画をつくり、営農専門部会の手で、定款や補助事業にするための協議を重ねた。

そして平成9年2月に、土地利用調整のための「木精の里・集落営農組合」、「同機械協同利用組合」を設立し、施設整備が始まった。さらに、法人化することで、補助事業が受けやすくなり、企業的、経営的発想で農業に活力と夢を持つと、11年11月に農業生産法人「ファーム木精」を設立、代表取締役に加瀬部さんが就任した。



ファーム木精事務所&機械格納庫の前で。
加瀬部一倫さん(左)と中島隆一さん。

現在、集落営農組合(組合長・那須敏明氏)の組合員は52戸、農業資材の一括購入や作業受委託、飯米の斡旋等をおこなっている。一方の機械共同利用組合には23戸が加入、機械を使った共同作業や水稲・大豆転作作業の受託をめざしている。

「お年寄りの中には、自分たちの仕事を奪うのかと言う声もありました。育苗、防除などを含めてベテラン高齢者に委託しなければならぬことがたくさんあります。今まではただ働きでしたが、これからは賃金を支払っていきますので、やり甲斐があるはずですよ」と加瀬部さん。



◀田植え機、トラクター、コンバインなどが完備した格納庫。一部個人所有の機器もあずかっている。



◀事務所には23名の社員が出社した時、各々が押すタイムレコーダもある。

この日は監査役の肩書きを持つ中島隆一さんも来て各地を案内してくれた。中島さんはカメラマンで土曜日は松江市へ働きに行くが、平日は地元にいることが多く、虫や土壌等の物知り博士なので、加瀬部さんのよき助っ人でもある。

集落の中央部に設けられた機械格納庫が事務所になっていて、奥には精米施設も完備、事務所にはパソコン等のOA機器もあり、夜になると会員たちが集まってくる。

その周辺の水田や畑ではほ場整備工事が行われ、同時に町の事業として集落の道路整備も実施中。「予定では今年はもうすべての整備を完了して、水稲と大豆の畑が美しく広がっているはずでした」と中島さん。

●都市からコンピュターのベテランを迎えて

島根県には農業等の担い手を育成するため「定住促進事業」があり、イターンした人には助成金が支給される。「ファーム木精」では今春地方へ就業したい人向けの雑誌に、農業への夢を持ちつつコンピュター等に精通した人を募集したところ、問い合わせがかなりあり、金岡豊さんという49歳の元外資系の商社マンが来村することになった。

将来は、農業体験者やイターンする人向けに住宅や交流施設も建設していきたいが、金岡さんはしばらくは町営住宅に住み、専属正社員第一号として情報通信分野を担ってもらおうという。奥さんは仕事をしているので2年後に移住してくるようになっていく。

「農地を集積して、徹底的に有機質な土壌を作る。農作業は機械等を使って我々がやりますので、労働力としてはなく田舎が好きで、知的センスがあり企業の発想のできる人に来てほしい。そんな人が参加してくれることで、



メダカが棲み、蛍も飛ぶ頓原川。
消毒をできるだけ減らして、美しい自然を守っていくことも会の重要テーマ。

刺激剤となり地域に活気が出てきます」
加瀬部さんの夢は、ブナ林から生まれた美味い水で育てた有機米をブランド化すること。大豆も有機栽培して、味噌等の加工品を作る計画だ。お年寄り等には育成牛を飼育してもらい、堆肥としても活用していく。

頓原地区は初夏になると蛍が飛び交い、川にはメダカも生息している。都市からの社員がきて会社経営が軌道に乗ったところ、またぜひ訪ねてみたい。

文／浅井登美子 カメラ／小林 恵

間伐材の粉炭を土壌改良材・調湿材に 炭入り飴、うどん、コンニャクなどユニークな炭食品も 南牧村森林組合(群馬県南牧村)

炭の持つさまざまな効用が見直され、今、各地で炭ビジネスによる村おこしが盛んだ。中でも、炭を食品に入れて売り出すというユニークな試みをしているのが群馬県南牧村の森林組合。過疎の山村で生まれた新しい産業は、村の人たちの協力を得て大きく育とうとしている。

炭ビジネスで村と山を守れ

「南牧村には山と川以外、何もありません。でも、そこに魅力があるんです。何もなければこそ、可能性を秘めていると思いませんか」

そう話すのは、南牧村森林組合長の工藤哲さん(60)。炭ビジネスの仕掛け人ともいえる人物だ。

コンニャクの産地として有名な下仁田町から車でおよそ15分。群馬県の西南部、標高1000メートル級の山々に囲まれた南牧村は、西から東に流れる南牧川に沿って広がる。面積の90%は森林。およそ1350世帯のうち950世帯が森林組合に加盟する林業の村だ。しかし、人の手が入っているのは全体の3割程度で、近年、山は荒れてきた。

「輸入材に押されて国産の木はただ自然にな



「炭を使ってくれることで、山が守られる」と語る、南牧村森林組合長の工藤哲さん。

つてしまっていてね。売ってもお金にならないので林業家は山の手入れをしなくなったのです。このまま放置したら山は荒れて、自然破壊につながってしまいます。売れない間伐材を何とかして生かしたい……それが、炭づくりを考えたいきっかけです」と工藤組合長。

山に手を入れることは、木の生育に適した環境を作るだけでなく、風水害から地域を守る。また、間引いた小さな木は炭にすることで燃料となり、最後は土に返すことができる。

「炭は環境にやさしい循環型資源なんです。石油や原子力の原料・ウランが100年以内になくなるといわれ、国も最近では間伐材の炭利用に注目してきています」

平成8年、国と県と村の補助を受け、南牧村星尾に「粉炭センター」を設立した。粉炭というのは、木を砕いてオガ粉にした後、焼いて作った炭のこと。粉にすることで消臭・調湿効果が増し、製品にする際も扱いやすいというメリットがある。

炭入りの飴、コンニャクが村の名産品に

炭製品といえば燃料をはじめ、消臭材や除湿材が一般的。しかし、南牧村では、炭を食品に入れて売り出しているところがユニーク



粉炭センター外観(上)と工場内部、炭化炉。



南牧村森林組合が製造販売している製品。





▲接着剤を使わず、和紙の原料と炭だけで作る紙は健康的と評判。イシコーの石井さん。



▲炭入り飴 森林のお成つきを作った信濃屋金田さん親子。
◀栽培から製造まで一貫して炭にこだわったコンニャク「腹黒代官」を作る田村靖一さん一家。
▼民家再生を手がける佐藤士志雄さん。床下調湿材を入れると冬温かく夏は涼しくなるとか。

だ。発案者はやはり工藤組合長。「炭について、ほとんどの人が〈燃料〉というイメージしか持っていないでしょう。それでは販路を広げられない…というので、考えたのが健康食品に利用すること。実際、炭には薬効があるといわれます。この村では昔、炭を民間療法に使っていたんです。物が不足していた戦後の頃、下痢や腹痛を起こした時には炭を食べなさい、といわれ

たもんです」

食品に使うことを決断した理由はもう一つある。村の養豚業者が豚舎の悪臭に悩んでいた。そこで炭を撒いてみたら効果抜群。しかも、撒いた炭を豚が食べることによって、病気をしなくなったというのだ。

食品衛生法で炭が添加物（炭末色素）とし



て認められていることもわかり、いよいよ商品の試作に乗り出した。平成10年のことだ。第一号は飴。試作は村のお菓子屋さん「信濃屋」が

受け持った。粉炭センサーで作った炭を使い、香りづけにニッキを入れた。しかし、その評判は今ひとつ芳しくなかった。炭の粒子が粗すぎて歯に当たるのだ。そこで、粉炭センサーでは、炭をもっと細かくするため外部の業者に出すことにした。そんな試行錯誤の末、商品化されたのが、木炭を小さくした形の真っ黒い飴「森林のお成つき」。信濃屋2代目の金田鎮之さん(29)は、

「両親と僕の3人の合作です。母が形を決め、僕がネーミングを考えました」と満足そうに話す。

つづいて平成11年4月には、田村靖一商店が炭入りコンニャク「腹黒代官」を作った。「昔のコンニャクも凝固剤に木炭を使っていたそうです。炭を入れることでコンニャク特有の匂いが消え、歯ざわりや風味がよくなります。『腹黒代官』は、炭の土壌改良材を入れた畑で育てたコンニャク芋を使うなど、栽培から製造まで一貫して炭にこだわった製品です」と長男で専務の裕一郎さん(29)。

炭には整腸作用や脂肪分を吸着する特性があるため、ダイエットにも効果大。糸コンニャクは素麺風に、玉コンニャクは刺身感覚で、どちらも生で食べるととてもおいしい。

ちなみに、「腹黒代官」というユニークな名前をつけたのも彼。裕一郎さんと信濃屋の金田鎮之さんは地元の中学の同級生。若い感性が、村おこしの一役を担っているというのは

頼もしい限りだ。

名物・炭入りうどんを食べる

お昼は、民宿「かわくぼ」で炭入りうどんを食べることにした。昨年の夏に新聞で紹介され、その反響で全国から注文が殺到したという人気メニューだ。うどんづくり歴20年の店主・岩井すみさん(68)が、巧みな手つきで麺を打ってくれた。

「炭を入れることには最初、抵抗があったね。でも、組合長さんの熱心なすすめでやってみたら、弾力が出て、なめらかになって、かえって上手く出来あがったんですよ。一口食べたら、お客さんはみなおいしいと言ってくれますよ」

10人分、1キロの小麦粉に対して、混ぜる炭の量はわずか6グラム。それでも、丸く薄く伸ばされた生地の色はまざれもない灰色。「うどんは白いもの」という固定概念があるせいか、違和感は否めない。

打ち上がった麺を早速、「ざる」にしてもらった。シコシコとした歯ごたえ、滑らかな食



巧みな手つきで麺を打つ岩井すみさん。クール便で送ってほしいと頼まれることも。



▲腹黒代官等の粉炭入り
コシヤク
岩井さん自慢の炭入りうどん



感。カツオや昆布を使って丁寧につくったダシに讃岐風のコシのある麺がよくあい、予想を超える美味しさだ。ざるうどん、温うどんともに650円。来店の際は予約が必要だ。

地球に優しく人を癒す

食品以外の炭製品ももちろん魅力的な物が多い。たとえば、炭でできた特殊な紙「杉炭紙」や炭とそば殻が入った「南牧村の炭枕」、消臭効果抜群の「木炭パック」や炭の入った布団まである。

製造・販売元の㈱イシコーは、南牧村の森林組合と共同で間伐材の有効利用を研究し、これらの製品を作ったという。

「シックハウス症候群で悩んでいた人が、壁に『杉炭紙』を貼ったら治ったという例もあります。また、『南牧村の炭枕』は消臭・調湿作用で心地よい眠りを誘います」

と、社長の石井弘樹さん(38)はPR。

さらに、これらの製品のもととなる粉炭を作っている粉炭センターでも、独自の製品を開発している。たとえば、良質の粉炭に木酢液を加えてつくる土壌改良材『NC』。畑の土に混ぜると、健康で味がよく、しかもミネラルの多い作物が収穫できるという。その理由を、粉炭センターのセンター長・茂木芳春さん(47)はこう説明する。

「木炭は多孔体なので、水はけ、水もちがよくなります。また、微生物のすみ家となって有用微生物の活動を活発にします」

『かいてき』という名前の住宅床下調湿材もある。木炭の持つ消臭・調湿・防虫効果を利用したもので、床下に敷き込むだけで、半永久的に水滴、カビ、シロアリ、悪臭などの心配がなくなるといふ。

「これはスグレモノ」と感心したのは、難熱処理を施した粉状の炭『炭っ子名人』。魚など

を焼くグリルの受け皿に水の代わりに敷き詰めて使う。

炭のもつ遠赤外線効果により、焼き上がりがよくなるほか、グリル内の脱臭効果も期待できる。また、料理から落ちる油分が炭に付着するため、付着した部分だけを生ゴミとして処理することが可能。グリルの受け皿にたまる油分を廃水として流すことがなくなり、河川の水質保護にもつながる。使用後は、土壌改良材や生ゴミの脱臭剤にもなる……といふことづくめだ。

炭ビジネスが過疎に歯止めをかける

炭を作っているところを見せてもらうため、粉炭センターを訪ねた。工場は森林組合から車で約20分ほど離れた村のはずれにあった。

プレハブの工場の前には、杉の間伐材がうずたかく積み、一見したところ製材所のよう。しかし、工場内に入ると大型の炭化炉がドーンと目に飛び込んできた。1億5000万もの巨費を投じて購入したというこの機械、木材をオガ粉にして、熱風で乾燥、さらに650度〜700度の熱で炭化させ、袋詰めするまでの全工程を1時間かけて、これ1台でこなすという。茂木さんによると、乾燥する時の熱風は、炭をローストする際、発する熱を利用しているとか。エネルギーを無駄にしない工夫はさすがだ。

粉炭センターの従業員の中に、東京からのUターン女性がいた。曾根久利子さん、43才。実家は、工場のすぐ近くの羽沢という集落。7年前まで東京で働いていたが、身体を壊しこの村に戻って来たという。

「ハウスダストが原因で気管支炎を患ってしまいましたね。病院に通ったり、薬を飲んだりしましたが咳が止まらなかったのに、南牧村に帰ったら2ヶ月で自然に治ってしまっ



「んです」

粉炭センターで働くようになったのは2年前から。当初は、炭の効用も作り方も何も知らなかったが、今では、炭化炉の機械操作を任せられるまでになった。工場内の温度が45度にもなる暑さの中での労働は大変だが、不思議に病気をしなくなったという。

粉炭センターでは、もう一人、東京からUターンした前橋出身の男性が働いている。炭ビジネスは、「若者の働き口」という「副産物」をも生み出していたのだ。

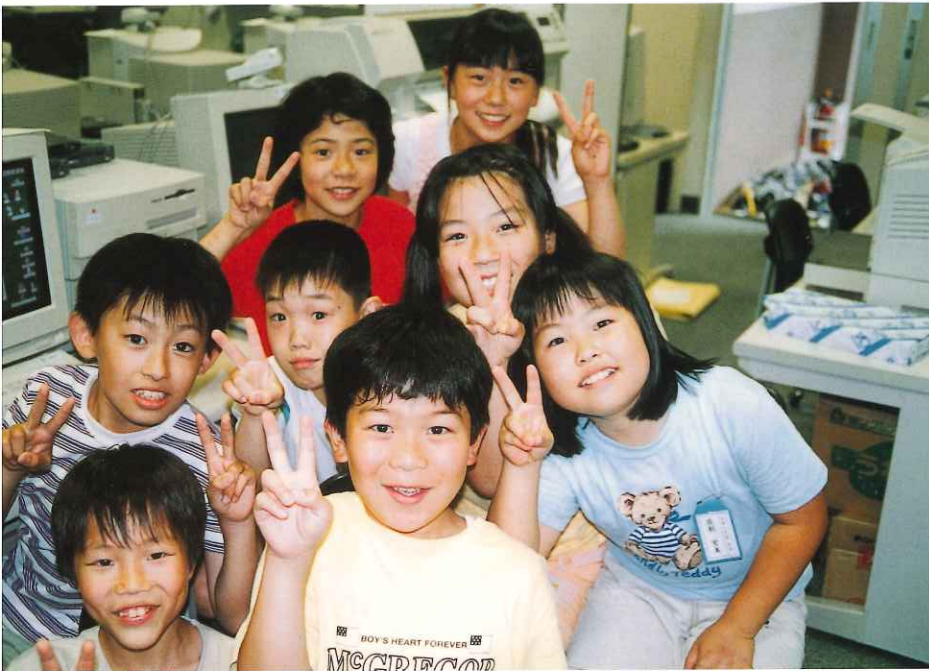
取材を終え屋外へ出ると、雨に洗われた森の緑が、みずみずしく輝いて見えた。帰路の車中で、工藤組合長の言葉を思い出した。「炭を使うことで山が守られるんです。日本の水や空気を守るために、山の現状をもっと多くの人に知ってもらわなければ」

振り返ると、霧のかかった南牧村の山々が墨絵のような美しさをみせていた。失ってはならない「日本の風景」だと思った。

文／小田礼子 写真／小林 恵

和気あいあいと働く粉炭センターのスタッフ。
左から茂木芳春、曾根久利子、八木周二、石井武重のみなさん。

まず触ってみる。村民に自信と安心を。 パソコン普及率90%の“**電腦村**”(富山県山田村)



県都富山市から22キロ、県の南西に位置する山田村は、標高1000から10000メートルの山峡にある過疎の村。人口およそ2000人(戸数約450戸、高齢化率24%)で、産業は観光(スキー、温泉)と農業から成り立っている。もったったパソコンフレットには、「下水道普及100%」「水洗化率89.5%」とあり、さらに「パソコン普及率90%」と記されていた。電腦村の今を取材する。

中学校の要請から始まった

そもそもは平成7年4月に、「パソコン通信のための回線を」という村の中学校からの要請がきっかけだった。ここ山田村では幼稚園、小学校、中学校と

同じ仲間たちで過ごす。メンバーが変わらず、どうしても引つ込み思案、内向的になりがちだという子供たちに、早くから交際術を身につかせようというのが、当時の狙いだったようだ。

その声を大きく推進するための起点となったのが国土庁のモデル事業。翌8年1月に、「地域づくりのための情報化を地域ぐるみで」をテーマとするこの事業の交付決定を受け、3月には村民を対象とした説明会を開催、村は急速にネットワーク化の道を辿ることになる。

各戸にテレビ電話付きパソコン

翌年の夏より、テレビ電話付きパソコンの貸与が始まった。全戸437戸(当時)のうちのおよそ75%に近い323戸に配られ、拠点として情報センターがつくられる。

「そのころはちょうどテレビのコマーシャルで、インターネットという言葉をよく耳にするようになっていました。それでもお年寄りたちは「一体、何それ?」という反応。『そんなものより草刈り機でも支給して』という人もいましたね」

なにしろ、情報センター職員山崎睦美さん自身、コンピュータ操作のことはほとんど知らなかったというから、当時の苦労は相当のものだったろう。

実際、パソコンを地域に導入しようとして、現実的に成功、機能している例は残念ながら多くはない。会社のように日常的



▲話をしてくれた山崎睦美さん。
◀役場にほど近い情報センター。

な仕事や業務で必要に迫られることがないのだから、当たり前といえは当たり前前だ。そのあたりを山田村はどのようにクリアしたのか。

パソコンリーダー大活躍

まずは「パソコンリーダー」(山田村情報推進委員)の活躍があげられる。各集落から選ばれた45名が村からの委嘱を受け、近所の人の相談に乗るというシステムだ。

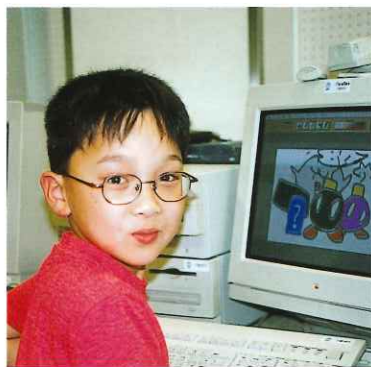
選ばれたとはいえ、彼らもまた、パソコン初心者。これで問題は解決するのだろうか? 「業者さんに聞く、となるとどうしても引いてしまう。それよりは身近な仲間に相談するほうが気軽ですね。それに、初心者同士がああでもないこうでもない機械をいじっているだけでも、以前よりコミュニケーションが活発になりました」と山崎さん。

このほかにも学生たちが指導のために村に短期滞在するふれあい祭(今夏で3回目)や





▶ポスターやアルバムもパソコンで制作。
▼放課後、子どもたちで賑わうパソコン室。



▶麻島典子教頭先生。
▲マウスを使ってイラストを制作する児童。



「山田村を勝手に応援する会」など、村外からの心強いサポートも多い。「電脳村」として多くの視察や取材に人が訪れているが、このことも村民の意識の変化に一役買っている。パソコンが「魔法の箱」のように思えるという山崎さん。実は彼女のお母さんもパソコンの達人である。しかし「コンピュータの前に座っているだけじゃだめ」と言われ、iモードの携帯電話を購入した。今では「じゃがいもの花が咲いたよ」もうすぐトマトが色づくよ」と畑からメールを打つそうだ。

小学校のパソコン室を訪ねて

マルチメディアを具体的にどう活用しているのか、山田村の小学校を放課後に訪ねた。児童数107名（5月1日現在）で、いちば少ない学年は一年生で10人だ。話をしてくれた麻島典子教頭先生は、今年

の4月に隣の八尾市から山田小学校に赴任してきた。教頭先生といっても図工や家庭の授業を実際に受け持っている。

「もちろん以前の小学校でもパソコンは取り入れられていました。でも山田村ではネットワーク化が進んでいるし、子どもたちだけではなく、お母さんでも使いこなせる人が多い。私も本当は教頭のホームページをつくらなくてはならないけど、毎日が勉強でなかなか追いつかないんです」

山田小学校のホームページをのぞいてみよう。学年ごとのページのほか、学校行事を報告するページ、栄養士さんからの給食のメニュー紹介など、メッセージが盛り沢山だ。特に養護教諭（保健室）のページでは、父兄とのコミュニケーションが活発に行われているとのこと。また、LANが導入されているため、各教員がまとめた教育計画を同じ書式にまとめることができる。

ネチケットが今後の課題

廊下の壁に貼られているのも、パソコン制作によるものだ。デジタルカメラの映像を編集した行事報告や、色鮮やかな子どもたちの絵など、ほとんどすべてがデジタルだ。

校舎の三階にあるパソコン室に案内してもらった。放課後は誰でも自由に利用できるという部屋には、すでに子どもたちが20人以上集まっている。マウス



▲「ともかくコンピュータに触れることが大事」と山崎吉一村長。

で絵を描く子もいれば、授業の調べごとのためにネット検索する子もいる。しかし走ったり転がったりともかく賑やかで、「パソコン室」とは思えない。

学校では、使うことを奨励しているだけではない。個人情報やプライバシーの扱い方、ソフトウェアのダウンロードの問題など、父兄も交えてこれからきちんと考えていくべきことがある。教務主任で、学校のホームページ制作にも携わる北林和先生は言う。

「マルチメディアを十分使いこなすと同時に、ネチケット（ネット上のエチケット）も早くから身につけてもらいたいですね」

安心と誇りを持って暮らせる村を

「正直な話、私自身、パソコンはどうも苦手なんです。ただし、どれだけ使いこなしているかという現状と、そういった設備がまず整っているかどうかという問題はまったく別のような気がします」

山崎吉一村長は気さくにほほえみながら切り出した。モデル事業の交付から4年、「情報化」ということに限定せず、どんな村づくり、地域づくりをめざしているのだろう。



「家のパソコンは孫が使うだけ」といおばあさん。

「これからは情報化の時代だ、という言葉はもはや世の中の常識のように言われています。私はずっと前提にしていたのは、そういう世の中に村民がくっついていける環境をつくることだった。都市だろうが田舎だろうが、関係ない。情報を受けたり逆にこっちから発信したりできる環境づくりをまず整えて、人々に安心感を与えたかった」

情報から疎外されていないこと。まずはそういう意味での安心感づくりから始まった情報化の動きは、持続していくことでほしいに

山田村への誇り、自分自身への誇りとなっていく。「自信はパソコンができるということから得られるものではないと思います。視察や取材、ボランティアの人たちが多く訪れることで、自分たちの住んでいる場所を客観的に根本的に見直すチャンスが増えた」

たとえばそもそもは村の情報化を応援しようとして集まった大学生を、村の人たちは自分の畑で育てた野菜や川で採れた魚でもてなす。これらの催しがやがて交流として根つき、逆

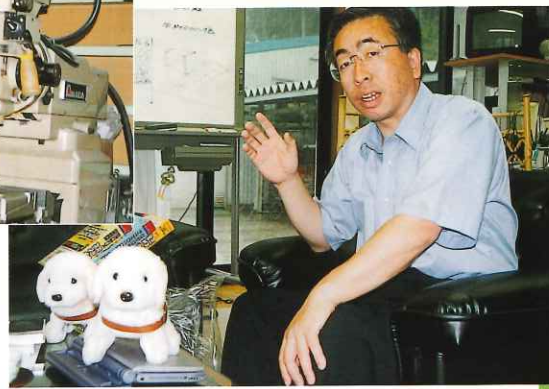
にふる里体験のような形の効果をもたらすこともある。実際、モデル事業で山田村の名が全国的に広まり、移住したいという問い合わせも数10件きているらしい。「免許証を取るのと一緒に、コンピュータも見ていただけじゃだめ。ともかく触ってみる、キーボードをたたいてみる、それでもダメなら電源を抜いてみる(笑)」

そうやって笑う村長さんだが、これからも人々の発想の転換を促す地域づくりをしていきたいと締めくくった。取材/斉藤四葉

心のエンジンを全開に！

電腦村の仕掛け人 倉田勇雄さんに聞く

山田村を日本有数の電腦村へと導いたのが、倉田勇雄さん(48歳)。村に生まれ、大学を卒業後は大手機械設計会社に就職、その後独立し、94年に山田村にUターンした。きっかけは父親の面倒を故郷で見たいと思ったからだ。



倉田設計事務所がつくるホームページのキャッチコピーは「コンピュータは良き道具。技術社会は笑顔と遠隔頭脳との融合」となっている。村に会社があるとはいえ、社員は東京や富山市などでそれぞれ在宅勤務。テレビ電話やインターネットを使い、連絡をとりあう。

今でこそ「整備アドバイザー」として村民から頼られる倉田さん、だがUターン当初は近所つきあいもほとんどなく、「おかしな機械」「コンピュータをいっぱい持った変わった奴」と思われていたようだ。国土庁からモデル事業指定の内示を受ける前後から、中心的な存在に。どういふ形のネッ

トワークが可能か、役場に通って連日連夜話し合いが持たれたという。「国土庁側から送られた事業の前身は、各家庭に配布する形ではなく、公民館などの特定施設にパソコンを集中配置する方法でした。しかし一局集中型の設備がどれだけ利用されるか。畑仕事や近郊都市への通勤で忙しい人々が、わざわざ足を運ぶかは疑問でした」

つまり全国各地にあり、実質の伴わない「情報センター」になることを恐れたのである。文字通り顔の見えるパソコンをとテレビ電話の設置、トラブル対応など、ボランティアで村内を駆け回った事業開始から5年、倉田さんは新たな取り組みを始めようとしている。「眠っているパソコンを掘り起こす、パソコンなんてやっぱり無用の長物だと思っているお年寄りのために有効な活用方法を考えたい」

地域の活性化、雇用の確保という点では、これまでは工業団地がつくられたり企業の工場が誘致されたりという方法が一般的に考えられてきた。しかしそうではない、もつと地元の宝を生かしたやり方が考えられると倉田さんはいう。

「情報インフラの可能性は無限です。そしてなにより自然を壊さない、地域の環境を変えない。福祉や文化事業についても同じです。大きな病院や立派なイベントホールを建てなくても、もつと暮らす人が安心できるやり方があるはず」

遠隔操作といえば、農地管理もその一つだ。村内のあちこちにポイントを設け、温度、湿度、pH、照度、風力などを記録、情報は周囲の映像と共にセンターに送られるシステム。これで農作業における入力負担が軽減されるという。この管理システムの対象は村だけでなく、県全体におよぶ可能性もある。

「IT(情報技術)産業がブーム。でも実際のところ、それを利用できるのはほんの一部の人にすぎない。つまり知識や技術のレベルがあがっているだけで、政治の仕組みが変わらないから、結局生活に生かされない。環境や福祉にそれをどこまで援用できるかが本場のITだと思っ」

パソコン普及率日本一の山田村。しかし倉田さんは「整備アドバイザー」というだけではなく、200以上の企業と製品の開発・販売にとり組むエンジニアでもある。すでに市場に出回っている製品から現在試作中のもので、オフィスはアイデアの宝庫。心のエンジン回転率100パーセント」をめざす倉田さん、この美しい風景の中からどんな製品が生まれるか注目したい。

揃った作業場に、倉田さんの作品を前に、倉田さんの著作「やる気がつくる」(共著)「山田村の行進曲」(共著)「インターネット」(共著)は、山田村の発展に大きく貢献している。



小さな町から情報発信! ネットで「過疎」サーチ

情報源の心強い味方とされるインターネットだが、過疎についてはどこまで可能か。もともとポピュラーなサーチエンジンの一つ、「Yahoo! Japan」で早速「過疎」をキーワードに検索開始。登録サイトでは、8件がリリースされた。順に紹介していこう。

住民の手で身近なふるさと 情報を——岐阜県七宗町

まずトップに出てきたのは、「たいらの獅子舞」。「8畳のたたみの上で舞うおとなしい獅子舞で、200年以上の歴史がある伝統芸能。最近の過疎化の問題や行事の内容、エピソード等」とある。この「過疎」という言葉に引かかったらしい。クリックしてみると、「まつあんのページ」(制作責任者、井戸松忠)というホームページにたどり着く。説明書きには「地元の獅子舞や石仏、山野草のことなど『身近なふるさと岐阜県七宗町の紹介』ページです。」とある。どうやら私は「19601人目の訪問者」らしい。

立ち上げだけは立派でも後はほとんど更新されないというホームページも多い。そんな中、この「まつあんのページ」はきちんと新しい情報が加えられているようだ。インターネットの魅力は、根気(と電話代)さえあれば、情報をどんどん追いつけられることだ。この中に、「興味深いものとして、「ボランティアネットワークひちそう」というページを発見。アクセスすると静かなBGMが流れ始めた。

「……私たちのふるさと岐阜県七宗町には多数のボランティア団体が活動中ですが、横のつながりがなくどんな団体がどんな活動をされているのかよく分からないのが実状です。(中略)そこで、各団体との連携を深めたいと

◀仲間と一緒に石仏(茶神様)の調査に。七宗町井戸さん(下)



の思いから、「七宗の自然を生かした元気なまちづくり」のために各ボランティア団体の有志の皆様による情報交換の場として「ボランティアネットワークひちそう」を結成しました。」「行政に何かを期待するより、自分たちから出来ることを考え実行しよう。」

会報を読んでいくと、マラソン大会のサポート報告や、月一回の美化運動の呼びかけ、ホテルについての勉強会、敬老会イベント、あるいは他地域との交流フォーラム運営などなど、盛り沢山だ。また、この活動の中心である「イベント倶楽部」は、昨年の秋にNPO法人の認定も受けている。

そのほかの構成団体としては、昭和59年に発足した「七宗町ふる里研究会」。昨年結成された高校生ボランティアグループ「moca」。炭焼きから優れた技術・文化を学ぼうと、炭焼き窯を管理運営している「思い出研究会」な



▶こちら苗床本部
ミドリネットの佐藤弘毅さん(平田町)

どがあった。

苗床情報から酒蔵、サイクルガイド まで——山形県平田町

次は山形県平田町からのサイトを覗いてみよう。人の横顔をした山形県の、ちょうど目のあたりに位置することから「目ん玉の町」と呼ばれる平田町。役場がつくるホームページも充実しているが、ここは個人のサイトに注目してみよう。

「平田町楯山だ」と題されたページ、キャッシュコピーに「平田町楯山は、自然豊かな山里です。戸数わずか38戸ですが、とても元気のある村です。」とある。

村の農協職員らが中心になってつくる「こちら苗床本部」では、きゅうりの接ぎ木方法から特産品のにんにくまで、園芸作物栽培マ



▶ジギスカン専門店のおぎきの元気スタッフ(標茶町)

ニューアルやバイオテクノロジーについての考察もある。ここはパソコン通信から始まったところなので、掲示板にみんなが気楽にアクセスしているようだ。

「田舎の酒屋いしぐろ」は、山形の酒蔵、おすすめ地酒をはじめ、山形の飲食店を紹介するページ。新着情報欄には、「大吟醸・庄内桶の川酒造の特別奉仕品」やら「月山ワイン2000年記念ボトル」など賑やか。ここで店主が異色な才能を発揮しているのは「インターネット株式投資実践奮闘記」と題されたコーナー。昨年12月に100万円を入金し以降の株式投資の経過と、こちらも熱の入る本人の分析が毎週末記載されているものだ。7月15日現在までの利益合計は……、これについては下記のアドレスにアクセスして確かめてみてほしい。

個性的だったのが、自転車とスノーボードの販売店主がつくる「サイクルぽーと」。最新モデル紹介やメーカー案内などもあるが、遊びのページが充実。「庄内弁講座」では、「あつげずば↓ゴミ捨て場」「ずろ↓囲炉裏」「おがべる↓カッコ付ける」もつけどありがとう、ごめん、すいません」といった方言の分類表がつけられていて、ほのぼのとした暮らしぶりがあふれている。

町も商店街も元気です！ 北海道標茶町

次は北海道の「標茶過疎ウツ！（仮装）商店街」（通称SAP）に飛んでみよう。

ここは地元の企業などによる通信販売など、22のコーナーが集結したページだ。文具屋、薬局、精肉店から温泉ホテル、鉄工所までさまざま。「釧路新聞」標茶支局もコーナーを持っている。

「ジギスカン専門店のごき」はIYcos（ライコスジャパン）肉類の部門でベスト・サイトに選ばれているサイト。人気商品8点の入ったお試し用「味自慢セット」（3800円）、そのほかにレシビ集あり、モニター報告あり、ページ全体がおおらかで楽しくつくられていて、商店街の元気づくりと賑わいが伝わってくる。

「蝦夷地昆虫捕獲企画」というなにやらあやしげな名前は、釧路湿原を本拠地にしたサイトの名称。地区に生息する昆虫たちを要望により捕獲し、販売する企画だが、「国、道、町の天然記念物や保護対象となっている昆虫等動植物の捕獲、採取はなんぼお金を積まれても絶対しません」との断り書きがある。

覗いてみると、なんと代表は六歳の男の子となっている。どうやら親バカ（失礼）が高いてつくられたサイトらしい。おかしなのは、目玉商品が「蟬の抜け殻」ということだ。コエゾゼミなるものの抜け殻が「大特価！3000円（一体）」となっているが、これがお得なのかどうかわからない。このページはここ数年は更新されていないようだが、ぜひ続報を入れてもらいたい。

SAPは役場や図書館、教育委員会などとリンクしている。ちなみに町役場のホームページはなかなかよくできている。

ネットの課題

さてここまで丹念に(?)ネットサーフィンして数時間。それぞれ写真やイラスト、音楽などを盛り込んだ個性的なページづくりをしていることがよくわかった。もちろん検索の方法次第では、もつと異なるサイトを多数発見できるだろうし、技術的、時間的な制約が

あって、思うようにページづくりが進まない人たちもいるだろう。それでも、これだけ多くの情報量を発信、受信できるのだからインターネットの力は強烈だ。送り手の立場でいえば、通信販売が軌道にのった「オンライン商人たち」は成功例といえる。

だが逆に受け手について考えてみると、彼らはコンピュータの前から一歩も動かさずに必要なものを取り込むことができている。ネット上のやりとりが、単にキーボード上の作業で終わるのではなく、実際に見知らぬ小さな村を訪れ、そこで地元の人と語るといった生身の交流になっはじめて、ネットワークは完成するのではないだろうか。

文／斉藤四葉

◆アドレス一覧



- まつあんのページ <http://www.02.kani.or.jp/~ido/index.html>
- ぼらんていあネットひちそう <http://member.nifty.ne.jp/~ido/index.html>
- 平田町橋山だ! <http://www.ic-net.or.jp/home/hirotosi/index.html>
- 田舎の酒屋いしぐろ <http://www.inetshonai.or.jp/hi85ishi/>
- こちら苗床本部 <http://www.midorinet.or.jp/~koki/index.html>
- さいくるポート <http://www.d8.dion.ne.jp/~c.port/>
- 標茶仮装商店街 <http://www.sip.or.jp/SAP/map.html>
- ジギスカンのごき <http://www.nikuya.com/>
- 蝦夷地昆虫捕獲企画 <http://www.sip.or.jp/~hyuuga/>



中国と日本の「一村一品」運動

関 満博

一橋大学大学院商学研究科教授

●画／北沢夕芸



「一村一品」と言えば、大分県の平松守彦知事が20年前から提唱し、全国的なうねりとなっていった。平松知事の「一村一品のすすめ」(ぎょうせい刊、1982年)によると、冒頭に以下のように記されている。

「一口でいえば、それぞれの町や村が、自分の町や村の『顔』となる産品を一つずつ開発して欲しい。それも一人よがりではなく、日本、いや世界に通ずる産品を育てよう!という運動である」。

この平松知事の魅力的な提案と大分県の実践が広く注目を集め、全国の農山村

で多様な実践が繰り広げられてきた。だが、その最近の成果はあまり聞こえない。全国に通じる、あるいは世界に通じる産品が育っているのだろうか。やや心配な気配である。

温州モデル郷鎮企業

私はこの十数年、中国の各地の地域産業に関心を深め、中国全土の面白そうな気配の感じる地域に踏み込み、実に多くの感動を得てきた。その中で、浙江省南部で興味深いものを見てきた。それは通称「温州モデル郷鎮企業」と言われるものであった。

文献等を調べると、中国の中でもとりわけ貧しい浙江省南部の温州あたりで、農民の個人経営の企業が活発に活動していることが報告されていた。

温州のあたりは海岸まで山岳地帯であり、耕地は乏しく、昔から農民は出稼ぎ、行商などで糊口をしのいでいたと言われる。だが、改革開放が開始された八〇年代の頃から、農民の個人が日用消費財を生産し、郷鎮(日本の農村の町、村

のレベル)に特産物生産をする産地が形成されているというのである。

ようやく温州の現場に行くことができ、驚愕した。温州の山間部の各地に專業市場と呼ばれる実に活気のある卸売市場が形成され、その周りが特産物生産の産地を形成していたのである。靴、ボタン、クギ、スイッチ、照明器具など、その製品は多岐にわたり、日本の県ほどの広さである温州市の範囲だけでおよそ500カ所もあるという。

私は、そのうち数カ所しかみていないが、いずれも、街の中心に数百軒から数千軒の卸業者が店をはり、朝から夕方ま



で活気に満ちた商売をしているのであった。そして、周辺の村に行き、郷長、鎮長、村長を訪れると、部屋には「一郷一品、一村一品」のスローガンが大きく掲げられているのであった。

私が「これは自分たちで考えたのか」と尋ねると、「そうだ」という答えが返ってきた。おそらく八〇年代から平松知事が盛んに訪中し、講演されていたことからそれが巡りめぐって浙江省の田舎の温州にたどり着いたのであろう。その来歴は別にして見事に「一村一品」を実現しているのであった。

文献による「農民個人の事業化」だけでなく、温州モデル郷鎮企業とは「専業市場」とのセットによって構成されていることがよく分かった。

市場による製品評価

ひるがえって、本家本元の日本の「一村一品」はどうなっているのか。私も全国を仕事で飛び回っているが、どうも思わしくない。

それは何故か。浙江省のケースを見て強く感じるのは、日本の場合は製品の「評価」が適切になされていないからではないかと思う。

つまり、日本の場合、地域振興をテーマにしている私などは特に、地方に旅した場合、地元の産品をお土産に買う。だが、家に持ち帰ってもあまり評判は良くない。その結果、それは二度と買わない。要は、日本の「一村一品」の産品は、旅

人向けの「お土産」レベルに留まっていることが少なくない。市場の厳しい評価を十分に受けていないのである。

この点、中国の「一村一品」の場合は、卸売市場と一体化され、日常的に全国からの買い手の厳しい「評価」を受けることになる。このことが製品のレベルを上げていくインセンティブとして働いているのではないか。

テキスト的に言うと、「市場」には需給調整機能、価格形成機能、物資の集散機能等があるとされるが、一番大事なものは「製品評価機能」なのであろう。

中国は日本のように全国流通システムが十分に形成されていないことから、むしろ地方に全国集散機能を備えた「専業市場」が成立している。

この点、日本のように全国レベルでの流通機能が強固に形成され、そのネットワークに乗れない産品は「お土産」レベルに留らざるをえないことも、「一村一品」に大きな限界を突きつけている。

このような構図をどう突破していくのが問われている。本家本元の疲労感とは対照的に、中国の農村には「一郷一品、一村一品」が幅広く展開し、「専業市場」は熱気と希望にあふれているのである。日本の関係者もその息吹にふれ、次の展開を考えていくことが必要なのではないかと思う。



●せき・みつひろ氏

1948年富山県生まれ。成城大学経済学部同大学院博士課程修了。東京都商工指導所、専修大学等を経て、現在一橋大学商学部教授。著書に「新「モノづくり」企業が日本を変えろ」(講談社、1999年)など。

少子高齢化が深まる中で、21世紀を担うのは、幅広く展開する「中小企業」と、それを支えていく「自治体」で、地域にとつての刺激的なリーディング・カンパニーを生み出せるかどうか、大きなポイントになると近著で語っている。



介護保険事業で
地域に安心と
活力を



小野寺さん夫妻。奥さんはご主人やホームヘルパーに看取られ、一昨年自宅で亡くなった。

保健・医療・福祉を一元化して 「福祉の里づくり」

藤沢町は北上山地の南端にあり、溪流沿いの集落、丘陵地帯、大規模農業と観光の高原地帯など、変化に富んだ地形の美しい自然郷。そんな町のほぼ中央部の高台に「福祉の里・藤沢」のシンボル施設がある。

町立病院、医療センター、特養ホームなどのいわゆる老健施設群である。鉄筋コンクリートの近代的な建物は、向かって右手にある古くなり手狭そうな木造の町役場庁舎と対照的で、町の福祉医療への取り組みを伺うことができる。

これらの施設はそれぞれが独立しているが、出入口が隣の施設と接合した複合施設になっている。就任間もなかった佐藤守町長がもう

生きる喜びを分かち、支えあう 在宅ケアとライフヘルプサービスを担って 「藤沢町ボランティアピアセンター」 (岩手県藤沢町)

20年も前に、高齢社会の到来を予測して考えたという。当時は福祉と医療はまったく別もので、県は施設の一体化に反対して補助金は出せないと言ったが、各施設を作って結合させ、県の怒りも後の祭りになったというエピソードがある。

これらの複合施設化と運営の一体化は「藤沢方式」と言われ、全国の市町村が目にした。その先駆けとして、79年より保育園と幼稚園を接合して建築し一貫性をもった幼児教育を行ってきたことでも知られる。

これらの老健施設の一角に、藤沢町ボランティアピアセンターがある。名称のボランティアは、ボランティアとユートピア(理想社会)を合わせた言葉で、共に支えあうボランティア精神と相互互助を基盤に「生きる喜びを町民みんなで分かちあう」ことへの願いを込めたもの。平成11年6月に特定非営利活動法人(NPO)として認可された。

専門スタッフと町民協力会員が 多面的に高齢者を支える

同センターの活動は東北でもいち早く、平成5年4月に福祉公社として発足、町民自らの手でサービスを供給する組織がつくられ、高齢者の福祉サービスを多面的に行ってきた。

「藤沢町が他町村と違うのは、全世帯が一般会員として加入して協力会費を収めてくれていることです。町には知的障害者の入所施設がありますが、こちらにも全世帯が加入して



藤沢町の中心部にある福祉医療センター(上)と町立病院。

会費(10000円)を払ってくれている他、ボランティア活動や行事にも積極的に参加してくれます」と渡邊直記理事長。
現在16名のベテランのホームヘルパーが行っているが、介護保険の適用を受けられない人でも、協力会員(住民参加型の有償制度)らの手で家事援助や通院、リハビリ等の援助が受けられるようになっていく。要介護の認定を受けた高齢者や障害者には資格と経験豊富なホームヘルパーが24時間体制で介護にあたり、これを「ホームヘルプサービス」と言っている。後者の家事や買物、通院等を支えるのが「ライフヘルプサービス」制度で、利

▲主任ホームヘルパー、ケアマネージャーの岩淵さん。



▲ベテランのヘルパーに安心して世話をたのむ老人。



用を希望する人は一時間400円で、サービスの担い手となる協力会員にはセンターが1000円を加算して時給5000円支払う。

「各地の福祉公社を見学したり住民の声を聞いて、無償だと頼みにくいし、協力会員も約束を破ったりしやすい。無理しない範囲で有償にして、相互互助のボランティア風土を根付かせたいと思っています。介護保険制度でサービス提供の対象にならなかった人でも町民なら誰でもサービスが受けられるというのが当町の方針で、ボランティアセンターの役割もここにありませう」

他に、移動入浴サービス、福祉機器のレンタルサービス、送迎サービス（車椅子利用者もリフト付バスで移送）、人材の育成各種研修、福祉ボランティアの養成等、地域福祉の中核をボランティアセンターが担っている。

1000人には100通りの介護を

藤沢町は昭和30年、1町3村が合併して発足した当時は人口1万6000人だったが、70年代にはいると4分の3に減り、現在1万9000人、約27000世帯になっている。

「高齢化率は会が発足当時は24%でしたが、いま28%をこえ、二三年後には30%になります。岩手県は全国平均よりも高く、すでに3割以上が高齢者という町村が多数あります。当町の場合も3000戸

が独り暮らしや夫婦高齢という高齢世帯。元気で何かあったらすぐ支援していこう、というのが我々の願いです」と語るのは澤田清一事務局長。

新規就農事業を全国でもいち早く手がけた人で、地域のことは隅々まで精通している。「このヘルパーさんは皆大変優秀ですよ。若い人で30歳、ヘルパーとして5、6年以上のキャリアを持ち、お年寄りや家族に信頼されています。ケアマネジャーの資格を持つ人、看護婦の資格を持つヘルパーもいますので、病院の先生にも高く評価されているんです」

お伺いした時は昼休みで、巡回していたヘルパーさんもセンターに戻り昼食しながら打合せ等をしていたが、午後1時になるとパッと出かけていった。残って、全体の調整や電話の応対に忙しい主任ホームヘルパーの岩淵恵美子さんに、手の空いたところでお話を伺った。

「1000人のお年寄りには100通りの要望があり、100通りの介護の仕方があると思うんです。私たちがよく話し合い確認しあうのは、いろいろなメニューを用意して、さあどれにしますかという介護ではなく、黙っていても痒いところに手を貸してやれるサービスをしたいということ。介護保険制度の施行で、利用者のニーズが多彩になったことは事実です。サービスを目いっぱい、利用額を目いっぱい使いたいという家庭が増えてくるようですが、ここらはまだ昔気質なので、特に要望が増えたということはありません。それだけに私たちが精一杯お世話していくことでしょう」と淡々と岩淵さんは言う。

2年前から24時間介護を行っているが、夜間や深夜の巡回は少なく、代わって最近要望が増えてきたのがモーニングケア。



「藤沢町は住民皆が高齢者や障害者を支えてくれる」と語る渡邊理事長。

朝7時頃に訪問して、起床や着替え、洗面、独り暮らしの人には朝食の世話をします。家族が居ても、朝は勤めに出るなど多忙だという事情もあるようだ。

その話を聞き「ヘルパーさんにも学校へ行く子供や親もいて、みんな朝の食卓を囲みたいだろう」と同情してしまう。

「それは仕方ありません。私たちはプロフェッショナルとしてこの仕事を選んだんですから、家族も理解してくれています」とにっこり。ヘルパーになって7年、仕事はもとより家でも主婦、母親として頑張っている様子が伺える。

移動入浴サービスを行っている現場へ同行した。一般にはデイサービスで入浴できるが移動が困難なお年寄りとか病気で動かすことが無理な高齢者が対象。高度機器を設置した入浴車を持っていき、部屋を温めながら入浴させるので、体力のある男性ヘルパーと看護婦資格の女性が立ち会う。その日は菖蒲湯のサービスもあり、入浴をするお年寄りは本心に心地よさそうだった。移動入浴サービスは一日3〜4人がやっとで、天候にも左右されやすいが、待ち望んでいるお年寄りのために、毎日各地へ出かけている。

リフト付バスは平成5年10月にある団体より寄付された。「それを利用してみて、今まで

移動入浴サービス。
 右上/寝室の隣部屋で入浴サービス。右下/家族と語る澤田事務局長。左/帰社して車の手入れ、清掃をすすめる男性職員。



なかつた寝たきりの高齢者がお花見やハイキングに行けるようになった。施設見学会や一泊温泉旅行会なども実施され、好評を博している。

車椅子の人がどんなに苦勞していたかが判りましたね。寝たきりだった女性が一度自分の実家へ帰ってみたいといふのでリフト付バスで連れていってあげたことがあります。生きていてよかったです。喜んでくれました。今は2台購入し、フル稼働しています」と渡邊理事長。

看護婦と毎日連携をとりながら 他町村の高齢者も対象に

平成11年度のヘルパー派遣回数は延べ9840回で、前年度より32%増えている。活動内容の特徴は、身体介護が増加し、全介護時間の81%を占めていることと利用者数の増加で移動時間が増えてきたこと。訪問入浴事業の利用者は40名で、2台が1400回訪問入浴を実施した。藤沢町の高齢者医療福祉行政の大きな特色は、冒頭でふれたように、医療・保健・福祉の一元化にある。病気で町立病院に入院した高齢者は、治療と復帰のためのリハビリをして、できるだけ早い時期に帰宅する。帰宅したあとは医師の指導のもとでポラントピアセンターのヘルパーが介護や家事援助を担う。そのため、夕方は5時半から10分間程度、毎日欠かさずことなく医師とヘルパーのミーティングが行われている。ヘルパーは誰がどんな病気で入院して、いつ退院できそうかを把握しており、医師は退院後の様子を毎日知りアドバイスすることができる。

隣接する特別養護老人ホーム「光栄荘」には102名が入所しており、センターに隣接しているため、お年寄りの様子がよく見える。入所者の25%が周辺町村の高齢者で、藤沢町のように在宅ケアが整っていない事情もあり、ずっと入所したいという人が大半だといふ。

町立病院の場合も同様で、町外の入院者が25%を占めている。そのために帰宅後の在宅介護サービスに藤沢町のヘルパーが出かける機会が増えている。

「遠い地区は17km、山坂も多い地形なので巡回は大変です。他町村の住民もここを利用したいという方が増えていますので、今後は広



高原地帯は、北海道を思わせる広々とした農地(写真は一面の菜の花畑)、放牧場、宿泊施設等がある。

域的に高齢者を支えていく体制づくりが必要です。病院・各施設、当センターはコンピュータを導入して一元化による医療福祉システムにしていますが、当町のように全世帯が協会員として支えてくれるという風土がないと難しく不公平感も生じてきます。介護は心です。ビジネスという考え方には対応できませんね」と渡邊理事長は言う。

センター主催の人材育成活動では、昨年だけで31名の住民が研修や実習をクリアして二級ホームヘルパーの資格を確保した。この中から家事や外出支援等を担う「協会員」が誕生していくだろう。現在協会員は74名いるが、町では高齢者を365日、24時間体制で支えるため「地域担当登録ヘルパー制度」の実現に取り組んでいる。

取材・浅井登美子
 写真協力・藤沢町ポラントピアセンター

山間10町村の24時間介護サービスをめざして JA雲南「すずらん福祉センター」 (島根県木次町)

女性たちのパワーを生かす 民間活力利用のモデルとして

介護保険事業では従来の市町村の介護システムに加えて「民間活力を活用して利用者が自由にサービスを選択して利用できる」と定められているが、民間業者の確保が難しい農村にとって強い味方がJA。各地のJAが

▲JA雲南では早くからホームヘルパーの養成に力を入れてきたが、最近では参加申込者が定員を上回り、若い女性や男性の受講者が多い。◀すずらんマークのついた車に乗って訪問介護に出発。後のビルの2階がセンター事務局。

介護サービス事業に参画しているが、そのモデル的存在がJA雲南。JA女性部は古くから地域活動を行い、親を介護するための介護講座も早い時期から実施している。

JA雲南は、平成5年に3郡10町村が広域合併して発足。6年からヘルパー養成講座を実施してきた。資格取得者が増えたことに加え、島根県からの要請で「過疎地域等在宅保健福祉サービス推進モデル事業」に指定されたため、2年前より「JA雲南すずらん福祉センター」として在宅介護サービス事業に取り組んできた。

対象となる島根県雲南地区は広島県と境を接する10町村。仁多町、横田町、大東町、加



茂町、木次町、三刀屋町、吉田村、掛合町、頼原町、赤来町で、人口は7万1、373人。65歳以上が28%を占めている。

しかしこれだけの広域地域を巡回することは効率も悪く、経営的には厳しいのではないだろうか。山間部は保守的な傾向があり、介護に関しても他人にしてもらおうとか、よその人が上がり込むことに抵抗を感じる人が多い

と聞く。今回の特集ではJA雲南が、民間ならではの介護サービスをどのように行っているかとともに、介護保険事業がビジネスとして成り立つものだろうかということを知りたいたいという気持ちがあった。

必要な時にいつでも 24時間対応の訪問介護をめざして

ヘルパーの養成に取り組んできたJA雲南では350人の資格者が誕生、それを「すずらん会」として登録、現在訪問介護サービスには登録ヘルパー126名（1級9人、2級81人、3級36人）が、365日24時間体制で対応している。

「10町村という広い地域ですので、その地域に見合ったヘルパーを派遣できます。中には身近にいるヘルパーでなく他地域の人に来てほしいという要望もあります。モデル事業は当初から365日24時間対応が条件で、必要な時間帯に必要なサービスを提供することが私たちJAの仕事。朝はおむつ交換と朝食の世話を中心で、8時台になるとデイサービスに出かける人のお手伝い。昼間は清拭や食事づくり、夕方から夜にかけては夕食の世話と入浴の介助が中心です。この地域はお年寄り家族と同居しているケースが多いので、深夜の介護の要望はほとんどありません」と金山登志子所長。

JAで地域福祉や保健業務に携わってきてヘルパー養成も担当した金山所長だけに、10

▶左から情報処理担当の畑さん、金山所長、ケアマネージャーの平井さん。職種ごとに制服をきちんと着ているのが気持ちよく、訪問の場合はお年寄りの信頼度にもつながるといふ。



町村のことに精通している。ご自身もお姑さんが寝たきりになり3年間共働きをしながら家族と共に介護をした。そのときヘルパーや看護婦、医師などに助けられ、昨年自宅で看取ることができたという。

「サービスを利用させてもらって本当に助かったという思いがありますので、JAもどこにも負けないサービス内容を考えています。ただこの地方は、いまだ親の介護はできるだけ子供や嫁がするという意識があり、親も皆に面倒かけたくないから寝たきりになったら施設に入るといふんです。各市町村の特別養護老人ホームもここへきて整備され、デイサービスやショートステイにも力を入れています。そのため当初の予定より在宅ケアの希望者は少ないですね」と金山所長。

家族も無理せず、お年寄りには心地よく入浴サービスに同行

JA雲南は在宅介護サービスのほかに入浴移動車による入浴サービス、介護用品の貸与サービス、ケアプランの作成や申請代行を行っている。依頼件数はそれほど多くないが、利用者から人気を得ているのが入浴サービス。ずらんセンターから1時間の赤来町のサービスに同行させてもらった。

お伺いした加藤武俊さんの家は昔ながらの広々とした中に使いやすい工夫が施され、緑の風が爽やかにそそぐ部屋で91歳、90歳のご両親が休んでいる。

入浴車は到着すると早速バスタブを隣室へ運び上げ、60度に湧かした湯をホースで入れていく。高橋さんら二人は看護婦の資格も持ち、入浴前にご両親の脈拍等身体の健康チェックを入念にする。バスタブの湯は溜めることなくどんどん流していくので清潔で温度も一定に保つ。「以前欽ちゃんテレビで入浴車を紹介した頃はバスを持って行ってそこで石油等で水を沸かして入浴してもらったそうです。この車は最新設備があり、一回ごとに完全に消毒し、湯もたっぷり使って入浴サービスをすることができんです」

入浴車は独自に改良してあるため、入浴しているあいだに寝具や身の回りのものを80度で布団乾燥する。これはJA雲南の無料サービス。

「この地方は雨が多くて、とくに寝ている人の布団を干す機会が取れにくく、体力もいる。この布団乾燥サービスも大助かりです」と世話をする娘さん。ゆっくり入浴を楽しんだお爺さんはふかふかの布団にはいり、さらに肌にスキンケアしてもらった。

「世話をする私たちもう60歳。二人の親を



入浴サービス車の到着。早速お年寄りとお世間話をしながら検診(脈拍、血圧等)し、入浴している間に寝具類の乾燥サービスを行う(左)。



ゆったりしたバスタブで入浴サービスを受け
るお年寄り。湯上がりのおと再度検診と爪切
りやお肌の手入れも。



風呂にいられるのは重労働で、近所に住む妹にもきてもらっていましたが、転んだ、腰を傷めたなんてことにならないうちにと、今年4月からJAにお願ひしたんです。他の人にもすすめてあげたいですね」

入浴車が着いた頃、隣で独り暮らししているという老婦人がやって来た。「広い家で一人きり。だからいつもここへ遊びにくるの」といってお祖母さんの枕元へ座った。86歳ということだが畑仕事もして日焼けしている。

とはいっても加藤さんが買物に連れて行ったり食事に招いたりして家族同様にお世話している様子が伺えて、自分の家や地域で安心して暮らせることの幸せと大切さをちらっと見せてもらった感じがした。

この入浴サービスは一割負担で1人一回1250円。加藤さんは毎週火曜日に利用している。この種のサービス車を保有している町村は少なく、軽度の場合はデイサービスにいつて入浴している。JAへの訪問入浴の依頼が増えてきているが、一日4軒訪問するのがやっとで、しかも天気が悪いかお年寄りの体調がすぐれないといつて予定日にキャンセルしてくるケースも多く、稼働率はあまりよくない。

「それでも待つてくれている人がいるのでやりがいがあります」と運転手と機器操作を担当する陶山さん。元タクシの運転手をしていたので地理に詳しく、おまけに綺麗好き。一時間前に出社して車を入念に磨き上げ清潔に万全を期しているという。

パートタイマー重視になる ことへの危惧も

JAすずらん福祉センターのパンフレットを見ると、利用料金がわかりやすく明記されている。たとえば、身体介護では、30分未満の利用者負担は210円、30分以上1時間未満で402円、家事援助では30分以上1時間未満が153円、複合型で273円。政府や新聞でいろいろ言われてきてさっぱり理解できなかったが、よくわかり、しかも安いことに驚く。複合型を朝と夜2回、毎日利用しても1カ月1万6680円の負担で済む。

逆に言えば、ヘルパーを派遣する事業社の方は採算をとるのが難しいということになる。「島根県では社協のほかに施設等も介護サ-



ビスに参入しています。元々人口が少ないため、ビジネスとして考えると成立しません。私たちは地域を支えてきたお年寄りに恩返しするという気持ちでやっています。でもヘルパーの資格をとり、それを役立てたいと思っている主婦や若い人達のためにはもう少し利用者が増えてほしいと思います。サービスの質の向上のために研修会を重ねており、みんな人生経験豊富なベテランでよくやってくれます。利用者とサービスを提供する側が心を一つにして、この雲南に住んでよかったと思われようしていきたいですね」と金山所長。

JAの介護サービス事業の推進役を果たしたのが、島根県保健福祉部。木次健康福祉センターの高齢者保健福祉係、武田敏主幹を訪ねた。

「当時、江角保健福祉課長が熱心に取り組み、10町村へも足繁く通いました。このJA参画が社協や町村関係者の大きな起爆剤になり、利用者の立場に立つて24時間対応するという取り組みが出てきました。JAのヘルパー養成講座は町村の職員も受講するほどレベルも高く定着してきましたが、30〜40代の地域の福祉活動を本気で担っていかうという人がパート化している。この傾向は町村主体の介護サービスにも見られます。パート化すると質の確保が難しくなると危惧しているんです。JAは出雲市や松江市、玉造温泉等の都市部では利用者が多く好評です。JA雲南は広域的にどんな山間部でも対応してくれそうです。今後はさらに必要な存在になると思います」と武田主幹は語っていた。

文／浅井登美子 カメラ／小林 恵



現在も火山活動を続ける有珠山山西麓。右手には灰に埋もれた建物が見える。

有珠山噴火から4カ月、復興をめざして 山と共生しながら観光・農業の町へ

北海道
虻田町、壮瞥町

3カ月半の長い避難生活を終えて、洞爺湖温泉街に住民が戻ってきた。ホテルの窓窓に明かりが灯り、商店も土産品づくりに一生懸命。洞爺湖を巡行する遊覧船も稼働を始めた。温泉街の後ろの有珠山山西麓からはいまでも白い噴煙が上がり、火山や地球の威力といったものを観光客も垣間見る機会になっている。

火山と共存しながら観光で生きる虻田町だが、マグマ活動は次第に低下しているものの終息宣言は年内は無理そう。火口に近い洞爺湖温泉町の山麓側の200戸・378人はなお避難生活を強いられている。3月29日の避難勧告以来、関係市町村は対策本部を設け土曜日を返上して勤務。一方帰宅した住民たちはいつもの生活に戻りつつも、観光以外に食べていく方法や今後自然とどう共生していくかについて模索を始めている。

● 人的被害ゼロ 有珠山火山活動の経緯

有珠山(標高732m)は20〜30年に一度の割合で噴火を繰り返してきており、最近では昭和52年に大爆発した。今回の噴火は山麓で発生、有珠山の裾野に位置しているため住民の中には「有珠山に属している場所だったことを今回の噴火で思い知らされた」と言うほど活火山・有珠山への関心は低い地区だった。山麓から洞爺湖にかけて温泉旅館等が集積し、洞爺湖温泉には年間400万人の観

光客が訪れている。今回の火山噴火は、概略次のような経緯となっている。

3月27日午前から火山性地震が次第に増加し、28日午後には山麓で有感地震が多発、低周波地震も発生し始めた。そのため政府は3月29日11時30分、有珠山関係省庁局長級会議を開催、それに従って同日13時30分避難勧告、18時30分避難指令に切替え、30日までに虻田町温泉地区等の住民の避難を完了した。

3月29日から30日にかけては壮瞥町壮瞥温泉でも震度5弱を7回観測、北屏風山西尾根斜面等で地割れが確認され、31日になると洞爺湖温泉に断層群、国道230号には亀裂も発生。そして13時10分ごろ山麓で噴火、噴煙の高さは最高3500mに達し東に流れた。翌4月1日には有珠山西北の金比羅山西側山麓でも新たな火口群が形成され噴火し始めた。その後も新たな火口が300〜400mの噴煙を上げながら活動を続け、最終的には50、60の噴火口が出来たといわれる。山頂部等の地殻変動は停止したが、山麓は約75m隆起し、いまま噴火活動を続けている。しかし火山灰には当初のようなマグマ物質はなくなり、噴火は終息に向かい出したと専門家は見ている。

この地震・噴火は明治43年の噴火状況とほぼ同程度、昭和18〜20年、52〜53年の噴火に比べると小規模だという。

我々が取材に訪れたのは6月下旬だが、西

▶立入禁止の洞爺湖温泉街。
(6月20日現在)
▲壮瞥町に設置された仮設住宅。
町の中心部に近いため生活に便利
だと入所者に好評。背後の山は昭
和新山(左)と有珠山。手前は果物
や野菜畑。



山麓の火口は想像以上に激しく噴煙を上げていた。ときどき小石状のものが肉眼でも見えるが、見学している町の人は「以前にくらべるととても穏やかでほっとしている」と言っていた。下方に火山灰で埋もれた工場や山荘が見え、噴火当時の激しさが伺える。

●7月には洞爺湖温泉再開へ 向けて——最新工法駆使

伊達市に入ると建設関係の車両、自衛隊、警察署関係の車が目につき、復興に向けて官民一体、急ピッチで動き出していることを実感した。虻田町の災害対策本部は庁舎の議事室に設けられ、役員職員らが常時12、13人土曜日返上で勤務していた。

見附孝蔵さん(総務部)は「最大9800人が避難所暮らしをしていましたから、いまは大分少なくなり(6月20日現在2329人)、これらの人も6月末には仮設住宅へ入所出来ます。5月までに440戸竣工、続いて町外を含めて350戸を建設中です」と言う。

当時の避難所暮らしは豊浦町に295人、伊達市に271人、虻田町に201人、計774人いた。体育館等での避難暮らしから2DKの仮設住宅へ、場所も比較的便利なところに設置されているので人気があるようだ。その中には温泉街従業員用の単身者住宅22戸も開設される。しかし住宅に入ると食事の支給がなくなるので、自立的な生活が必要になる。「お年寄りには、医師や保健婦、ボランティア等が健康面のケアに当たっていますが、避難生活は大変です。災害で亡くなった人はゼロでしたが、その後体調を崩したりして3カ月で32人が亡くなった。例年より3割多く、将来への不安や慣れない避難生活が影響していると思います」と見附さん。

この日は長崎良夫町長と堀達也道知事との会談が昼食を取りながら行われた。

会談のあと長崎町長は「山がどうなっているか気掛かりではあるが、避難者は皆一日も早く帰宅し仕事に復帰したいと願っています。そのため何時でも帰宅出来るよう、道路、上下水道、電気ガス等の復旧工事に全力を上げるとともに、観光や雇用対策、融資等について政府や道に要請、確認をいただいたところです。洞爺湖温泉のホテルや商店街は幸い無傷です。7月にはぜひ復興再開して、観光地として活気を取り戻したいと思います」と語った。

そのあと町長は事業主等に雇用の場を提供してくれるようにと室蘭市へ。伊達市の対策本部へはほぼ毎朝定例会のため出かけるというように、分刻みのハードなスケジュールを続けている。

虻田町にとつての課題は、いまだ

一度も帰宅できない危険地区の住民200戸・378人があり、中には降灰や土砂で埋まって再起不能という住宅もあること。泥流土石で流された金比羅橋周辺を災害記念として保全し、住民は移住する方法も検討している。

有珠山噴火による物的被害状況を対策本部の国土庁資料で見ると、電気は高圧配線事故等で各地で停電したが、伊達市内はその日に復旧、避難温泉地区も帰宅に合わせて復旧。ガス関係は事業者や住民が元栓を閉めて避難したため被害なし。水道についても虻田町では浄水場の元栓を閉めて給水停止、一時帰宅には給水車等に対応していたが点検を終えて4月初旬より給水を再開。電話は使用回線の増加により回線増設を即行した。



▲伊達市郊外にある有珠山災害対策本部。国・道・市町村の担当者が常時100人以上勤めている。
▶国土庁防災局島田明夫防災企画官。



▲虻田町長崎良夫町長



▲工事現場を視察する堀達也道知事

▶右/無人化工事現場。数100m離れた事務所からテレビ画像を見ながら工事を指示している。
左/災害現場へ出動する自衛隊。



夫防災企画官は「金比羅山周辺に400〜500m間隔でピニールを敷いて噴石を調べて

00人という大世帯だ。
同対策本部を指揮する国土庁防災局島田明

近くの工事事務所からテレビ画像を見ながら操作するもので、無人のパワーショベルがフル操業している。
我々が訪ねた時は、壮瞥町のホテルは開業していたが、数百メートル先の洞爺湖温泉はまだ立入り禁止で、道路の火山灰除去作業が行われていた。

被害が大きかったのが道路関係。道央自動車道は管理・制御機器や光ファイバーが断絶したり地山隆起等によるクラック、法面への火山灰流入があった。国道230号では、約1kmにわたって断層が発生したほか、泥流で橋が流失したり冠水、レール破損が生じた。現在工事現場の重要作業は、8kmにわたって堆積した路面上の火山灰を除去すること。月浦地区では大手建設会社社社合同による復旧工事が行われている。



▲壮瞥町壮瞥温泉の旅館「湖畔荘」を営む毛利さん一家。一般観光客は少ないが、調査や工事関係者のアットホームな宿に。

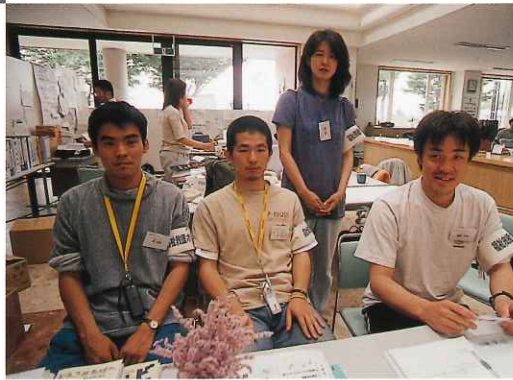


▲心配されたホタテ養殖だが、内海武さんの家では早期帰宅で家族皆が協力して対応したため大丈夫だった。長男も手伝うようになったのでますますやる気が出てきたとご主人。一部にはオホーツクから新たに稚貝を購入した漁業家もいるという。

●自然と共生しながら
観光・農業の町へ

壮瞥町の住民は約一カ月で避難生活から開

いる。私も何度か行ったが、もう大丈夫。火山活動は終息に向かっているの、住民対策に比重を移しています。ここは狭くて会議室らしいものもないけれど、それがかえっていい。各省庁、関係機関皆が首を突き合わせて協議し行動しています。震が関ではとても考えられない連携です。今回の災害では、地震予知連の先生方が単に地質や地震の知識を有しているだけではなく、地域や住民の暮らしに関心を持って対応してくれていること、住民の意識も高く協力的であることが、一人の死傷者も出さず災害を乗り越えてきた要因になつていると思います」と語る。対策本部は解散しても、このプレハブ本部は今後も残り、火山との共存を探る活動や対策の拠点にしていくという。



虻田町福祉センターの一角で働くボランティア活動の若者たち。お年寄りのケアや買い物、医者等への送迎をはじめ、帰宅者の家の清掃や修理等ベテランが多く、自発的によく働く。

放されて帰宅した。宿泊した旅館「湖畔荘」のご主人毛利泰人さん(40)は、前回の噴火の時17歳だった。今回の噴火について同った。「客がいたこともあり母は、この程度なら大丈夫と言つて避難しようとしなかつたんです。水道も亀裂が入つて通行禁止に、水道も

各地のベンチャー企業育成事業

起業家、起業家予備軍を支援する 「きのくにベンチャー・プランコンテスト」



和歌山県では、経済の持続的発展を実現するため、「新産業の創出・育成」を21世紀計画の戦略的構想に位置づけている。新事業をコーディネートする「わかやま地域産業総合支援機構」（通称ノらいほ）の創設、ベンチャー・プランコンテスト、フォーラム等を行ってきた。

コンテストは独自の優れた技術やアイデアをもつ起業家精神の持ち主の具体的なビジネスプランを募集（県外者も可）、最優秀賞、優秀賞、特別賞を設けて表彰し、入選プランを事業化する場合は「新規開業支援資金」を斡旋したり、(財)和歌山テクノ振興財団・インキュベートルームへの入居、経営・技術者のアドバイザー等が受けられる。

平成12年3月20日に開催された「ベンチャー・プランコンテスト'99」では、応募総数53件（県内35、県外18件）あり、最優秀賞受賞の若林さん（和歌山市）は織布研磨体研究。多様化する素材や加工の複雑化のなかで従来

の砥石やブラシ状研磨体に代わり長繊維という織物を素材にした研磨体の開発。

優秀賞は3件で、工業排水の完全リサイクル化施設の開発（和歌山市・中川さん）、アカリフス音の抽出液で漬けた梅干しの製造販売（田辺市・杉本さん）、インターネットによるメールビジネス（大阪府・本間さん）。これはスモールな規模事業を対象にして買手探しから価格設定、交渉等を代行する新規性を評価したものの。

特別賞は、地域住民と高齢者

「起業家養成塾」講座を開校して5年 マッチングブラザを開催

奈良県中小企業指導課

奈良県では県が主催して起業家育成の研修事業に力を入れてきたが、今年には県と中小企業振興公社、金融機関、技術者や経営指導者等が一同に会して「起業家マッチングブラザ」を開催した。

事業をはじめると同時に資金調達が大切で、銀行との橋渡しの機会がマッチングブラザ。そのためには事業計画をつくり金融機関に説明する必要がある、事業計画を現実性、将来性の高いものにするために中小企業診断士、技術士、政府系金融機関融資担当官らが個別にアドバイザーに当たった。

これらのビジネスプランは後

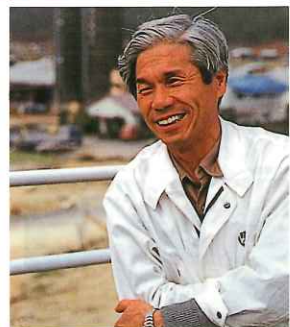
の保養施設（アリス保養村）の建設・運営をする東さん、梅肉を独自の方法で味付けして醤油がわりに使える「梅とろ」を開発した坂本さん。ともに女性で社会性がありビジネスになることが期待されている。

和歌山県中小企業支援センターから頂いた資料を見ると、「無洗米」にするための精米機械を開発して全国に工場設置をしている会社、間伐材を利用してきのこ栽培のおが粉「ウグラン」マシンを各地に届けている機械メーカー等が紹介されている。新事業の創出から風土づくりまで「ノらいほ」への期待は大きい。

(財)和歌山県中小企業振興公社
☎073(4300)3412

農業ビジネスの人材育成をめざして 「尊農塾」開設

山口県農村振興課／農業会議所



農業生産と加工業、販売サービス等を融合させる動きが各地で活発化しているが、そのためには就農して農業ビジネスに意欲をもつ人が地域にいかかどうかがキーワードになる。山口県では、複合的な農業ビジネスを推進し展開していきける人材を育成するため、平成12年4月から「尊農塾」を開設した。

第一期生として20名の県内在住（近い将来県内に就農する県外者も可）で農業ビジネスに意欲のある人を募集、15名が熟生として研修をはじめた。

研修期間は2年間で、1年目は(1)地域連携尊農マインド開発、(2)マネジメント、(3)マーケティング、(4)情報管理・会計のカリキュラムを用2回の開講で学んでいく。2年目は農業法人経営の実践演習、経営計画プランニングや調査研修、企画書の立案

等、実践的な学習を予定している。受講料はテキスト代等1年間3万6000円。

応募者は農業法人の二代目から定年後地域農業に意欲を持つ中高年者まで幅広く、福岡県から参加している人もいる。現在5名を追加募集中で、県では今後も継続事業として実施していく計画だ。

問い合わせは山口県農業会議所
☎0833(923)21022。

ITベンチャービジネス促進に 「サイバーウェイブジャパン」設立

三重県

三重県はIT（情報技術）関連のベンチャービジネスに進出するため第三セクター「サイバーウェイブジャパン」(CWJ)を設立した。

県が45%出資するが、従来の三七七とは一線を画し、外部からの公募スタッフによる人事とし、3期目で黒字化株式公開をめざす。

CWJの業務は、企業や自治体向けにサーバのレンタルサービス、ベンチャー企業へのオフィス賃貸等に加えて、障害者の雇用の受け皿としても機能していく。8月より営業を開始する。CWJの資本金は1億1000万円。県の他に近畿日本鉄道やKDDIなど民間企業6社が、1千万円ずつ出資する。

全国過疎問題シンポジウム
2000 in ぎふ



テーマ 自立と美しく風格ある地域
づくり — 豊かな自然・文化・
生活の創造 —

■日程と主な内容

10月31日(火)~11月1日(水)

- ・全体会 基調講演(長良川国際会議場)
早稲田大学教育学部教授 宮口侗迪
- ・分科会 (長良川国際会議場・
岐阜ルネッサンスホテル)
- 第1分科会「新たな生活空間・新たなライフスタイルの提案」
- 第2分科会「産業の高度化と地域産業の自立への挑戦」
- 第3分科会「地域文化の振興、美しく風格ある地域の創生」

編集後記

▶地方でビジネスを考えると時、そのモデルは農産物を育て加工し直売するバイタリティあふれる山村のお母さん達。儲けは少ないが農業が楽しくなり、生きがいや地域に活気が生まれた。その中から自然系の化粧品や食品が開発され、通販等でビジネスされている。お父さん達も既成概念を取り払って、「田舎こそビジネスの舞台」だと夢に挑戦していった。本誌で取り上げた炭粉入りコンニャクや藻塩等は大変美味しく感動の逸品である。(A)

▶コンピュータ関連の取材のため、久しぶりに『でばら』の仕事にかかわった。電脳村の山田村では、時間切れでいちばん楽しみにしていた(?)温泉にゆったり浸かれなかったことが悔やまれる。コンピュータがどんなに便利なツールであっても、やはり自分の足でその場を訪れ、生の自然に触れることが必要だ。取材を終えた今、そう思っている。(S)

De POLA NO.19

[でばら] 2000年 秋冬号

発行日/平成12年9月5日
発行所/財団法人過疎地域問題調査会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

編集協力・印刷/株式会社 ぎょうせい
編集工房アド・エー

「シニアベンチャー
創業支援事業」を
開始

群馬県工業振興課

群馬県は中高年の創業を支援する「シニアベンチャー創業支援事業」を今年の4月からスタートした。対象となるのは高度な技術や経験豊かな45歳以上で

あることが特色。リストアップなどで退職した中高年の社会性を生かそうという狙いもある。

同支援事業では、事務所の開設費、特許利用権取得費、研究開発費の半額を補助するほか、無料研修、給与の一部を補助する等の優遇もある。本年度は5件の応募があり、専門家等の審査を得て上位2件を支援することになっている。

産学官一体となって環境ビジネス
「滋賀県環境ビジネスメッセ」に各社出展

滋賀県では98年から(社)滋賀県工業会などの「産」、立命館大学などの「学」、県や長浜市などの「官」が一体となって「滋賀県環境ビジネスメッセ」を開催している。99年には県内201の企業や団体が出展して、3日間で約4万人が来場するという盛況ぶりだった。

出展企業の内訳は、企業168社のうち県内に本社や事業所

を置く会社が62%、大学・研究機関が29団体で、地域に密着した展示会であることが伺える。

会場は、クリーンエネルギーゾーン、環境支援ゾーン、リサイクルゾーン、水・環境技術ゾーン、環境商品ゾーン、国際ゾーン、低公害車ゾーン、大学・研究機関ゾーンの8つで構成されている。産と学の提携とコーディネート役の行政による交



流会、勉強会も盛んで、「1-SO」の認証取得企業も全国一、新技術開発への融資制度、環境産業立地促進助成金等の制度もある。

2000年度の環境ビジネスメッセは10月に予定。

企業家に育成資金

岩手県

岩手県では平成8年より、県内で新たに事業を開始しようとする人、独立開業しようとする人、「いわて起業家大学」の修了者を対象に企業家育成資金を融資している。貸付限度額は、設備資金2000万円、運転資金1000万円。また中小企業創造活動促進法の認定企業等で財団が認めた企業には、間接投資事業(限度1億円)、直接投資事業(1千万円)等、財団が投資を行う制度がある。(財)岩手県高度技術振興財団

企業家交流フォーラム、
研修会

愛知県

企業創業や業務拡大に必要な情報提供、専門家等のアドバイザーを目的に「企業家交流フォーラムあいち」を年1回開催。対象は企業の代表や独立をめざすサラリーマン、主婦、学生等で、

フォーラムの後、企業家ノウハウの学習、自主研究会を年6回程度開講しビジネスパートナーマッチングも。新産業分野チャレンジ研究開発事業費、新事業創出促進資金等、各種の資金融資制度がある。愛知県商工部、中小企業総合センター他

「くまもと21農業振興運動」
熊本県農政課

平成12年から3カ年計画で、「くまもと21農業振興運動」を展開し、変革による農業の元気づくり、生産者と消費者との共生を目的に各種活動を行っていく。参加するのは県、市町村、JA、消費者団体など23団体。米麦、野菜、果樹、花き、蘭業、畜産、特産品、農業農村の8専門部会を設けて、具体的な数値を折り込んだ報告をまとめていく。また、11月には「農業ウィーク」を設けて、農産物の直売や農家と消費者との交流、新しい農村への提案を行っていく。

夢がえる。

夢が買える宝くじは、
 暮らしへ還る不思議な幸せ。
 喜びしへ還る不思議な幸せ。
 収益金というカタチで橋や学校、舗道、公園の
 木や遊具などの建設および設置費等、
 さまざまに街づくりに活かされています。



●本誌は財団法人日本宝くじ協会の
 助成を受けて作成されたものです。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。



財団法人 **日本宝くじ協会**
 当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ
<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>